
怖い話をしませんか？

返歌分式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怖い話をしませんか？

【Nコード】

N6153V

【作者名】

返歌分式

【あらすじ】

『怖い話をしませんか？』学校の白い壁に貼られた一枚の紙。新聞部のネタのためでもなく先生達が企画したものでもないそれは、誰が書いたのか分からないものだった。その紙に誘われ教室に集まった生徒達が、一人一人ずつ滔々と語り始める。

プロローグ 前話

学校内、放課後。

窓が開け放たれ、そこから蒸し暑い風が滑り込んでくる。均等に並ぶガラス郡がほぼ全て開けられた廊下を僕は歩いてた。

もうそろそろ下校時間だというのに日はまだ空にある。初夏の時点でこの時間帯まで日があるというのなら、真夏はもっと空に日が滞在していることだろう。

暑いのも明るいのも苦手な僕はそのことを考えるだけでげんなりした気持ちになった。

面白おかしく雑談をしながら帰宅する男子生徒が横を通り過ぎる。僕はその横顔をちらりと見た。その時に会話も耳に入る。これから遊びに行こうという誘いと、それに乗る声。

僕はすぐに興味を無くして歩みを進めた。

生徒達が前からどんと来て横を通り過ぎていく。まるで僕一人だけが本来の流れに逆らって逆行しているような、何故だか少しもどかしい、あるいは気恥ずかしい思いを抱いた。

少しでも生徒達の目から隠れるように、夏服の胸元を軽く握り、首をすばめ肩をいからせた。

一直線の廊下の横にある、端よりも手前にある階段。階毎に正規の階段と非常用階段（といっても正規の方と造りはなんら変わりない）があり、そこから降りるために生徒達は流れるように人ごみを作るのだ。そしてその流れは一直線に伸びる廊下の丁度真ん中で分かれる。正規の階段を降りる側と非常用階段を降りる側だ。

何か計ったかのようにキレイに真ん中から分かれる生徒達に、僕はいつも不思議に思う。先生に言いつけられた訳でもないのに、生徒達は律儀にそれに従う。本当に不思議だ。

僕は廊下の端を目指している。

今日の僕の目的は、端にある教室にあった。

（さあて、何人集まってるかな？）

胸元を握っていた手を口元に移動させ、僕はにやける口元を隠した。

教室と教室の間にある白い壁に、一枚の紙が貼られていた。僕はそれをちらりと見て、再度ほくそ笑む。

その紙には「怖い話をしませんか？」というストレートな題字が書かれていた。

ちなみにそれを貼ったのは誰か知れない。いつの間にか貼られていた紙。渋い顔をしてその紙を見ていた先生方がそれを剥がすようなマネはしなかったので、一応は学校から許可を貰っているのだ。新聞部のネタにするわけでもないし、先生方が企画したものでもない。出所が分からないそれにわくわくした気持ちが高まっていく。

いからした肩がくつくつと震える。

楽しみだ。

そうこうしている間に、僕は廊下の端に辿り着いた。

何にも書かれていないプレートが掲げられた教室の前。

擦りガラスには内側から深緑色のカーテンがかけている。

気持ちがさらに高まり、僕はそれを抑えるために一つゆっくりと深呼吸をした。

よし、と呟いて僕は扉を開いた。

ブローグ 中話

顔が全部僕の方を見た。

そのことにびくりと身体が震え、僕は誤魔化すように「え？ え？」と声を出した。

声を出している間に、僕は教室内にある顔を忙しく見渡す。

この学校の制服を着た生徒達が、教室の真ん中で机を円の形に寄せ合って座っている。

数は五人。僕に背を向けて座っていた人すら顔をこちらに向けた状態で、僕は出迎えられた。

その中に知った顔は無かった。僕は五人の目がこちらに集中していることに慌てるも、どこか冷静に頭の隅で「思っていたよりも人数が少ないな」とこぼした。

困惑するようにきよきよと目を動かす僕を可哀想に思ったのか、女の子の一際明るい声が僕にかけられた。

「ねえあんた！」

「え、あ、はい？」

「何年生？」

「えと、二年生です」

「そうなの？ ええ、見えなあ、い。先輩なんだ！」

「う、……」

片手にぶら下げていた手持ちの鞆を胸に抱えて、その元氣すぎる声から身を守る。

後輩らしいその女の子は茶髪のショートカットの髪にパーマをかけており、小さい顔に大きい目をしたかわいい子だった。ただ、化粧をしていかにもといった風貌なので近寄り難い。

わざとらしく感じる「きゃはっ！」という声と共に口元に運ばれた手元には、ピンク色のマニキュアが塗られていた。

「先輩も怪談話するんですか？」

「え、うん」

「ビビりっぽそうなのに？ 怖い話大丈夫ですか？」

「いや、怖がりだけど、怖い話が好きで」

「やっぱり怖がりなんですねー！ 途中で失神しないで下さいよぉ？」

「はい……」

人の話をまったく聞こうとしない後輩に苦く笑いながら頷く。助けを求めるように周りの人たちを見れば、興味を無くした風な人やニヤニヤして僕を見る人、無言でこちらを見る人や控えめに笑い困っているような人がおり、その全てが僕を助けてはくれそうになかった。

僕は諦めて苦笑いのままその円に近づく。

「あの」

「あ、はい」

無言でこちらを見ていた人が僕に話しかけてきた。

常人より少し色素の薄い髪の毛。種を飛ばす前のたんぽぽのような頭をした男子だ。ちよつと抜けた顔をしている。今の僕にも負けないぐらい困った顔をしたその男子は、周りに雑にどかされた机を一つ、指差した。

指を差したまま黙る彼に、僕は何が言いたいのか分からずに首を傾げる。

「自分の座る机と椅子を持ってこいって言ってんだよ。そんなに分かれよ」

「う、ごめんなさい……」

今度は低い声だ。慌てて声のした方向を見ると、怒っているのか、厳しい顔付きで僕を睨んでいる年上っぽい男子がいた。

黒々とした短い髪の毛と初夏だというのにもう日に焼けている肌が、迫力を増しているような気がする。

よく見たら組まれた腕の筋肉が凄かった。それだけでも僕は戦々恐々としながら机を運ぶ。

たんぽぽのような頭の男子と怖そうな男子が間を空けてくれたので、僕は怖い人の横嫌だなあとはいつつもそこに机を置いた。

座つて一息吐いた僕に、しつこそうな声が降りかかった。

「君、陰気そうだね」

「え!？」

「うんうん、分かってるよ。陰気な君は陰気な話が好きなんだよね。明かりに誘われる虫ならぬ陰気に誘われる根暗君、だな」

「あの」

「俺？ 俺も確かに陰気な話が好きだよ？ いわゆる君と同じつてやつ。けどね、俺と君とでは決定的な違いがある。それが何か分かるか？」

「いえ……」

「それは何か。答えは僕が光で君が闇だ、ということだ」

「光？ 闇？ というより僕って……」

「そうだ。僕はゲームでいう光属性。陰気な話も吹っ飛ばす程の威力。正に光の勇者だ。それに比べて君は闇。暗あーい話に惹かれて幽霊みたいに引き寄せられた可哀想な奴なのさ」

「ええー……？ あの、ええー……」

「ちょっとそれ本気で言ってますかあー先ぱあい！ ウケるんですけどお？」

「まあ例えの話だからね。本気にされちゃあ困るよ、葵ちゃん」

「うわっ！　なんで私の名前知ってんの！？　キモい！　もうこれが怪談話だって！」

嫌らしくニヤニヤと笑う気障ったらしい男子に食ってかかる後輩。男にしては少し長いかと思われる黒い髪の毛の下はむかつくぐらい整っているため、ナルシスト寄りの自信家なんだろうなと僕は推測した。

いきなり僕を閥属性だと意味の分からない決め付けをしてくる辺り、自分の世界の常識が現実の常識だと疑わない、色々と倒錯している人なのかもしれない。なんにしる嫌な人種だ。

どこで自分の名前を知ったのか聞き出そうとしている後輩とそれを飄々と受け流すナルシスト男から目を逸らすと、視界に大人しそうな女の子が入ってきた。

艶やかなロングヘア！。目元で切り揃えられている黒い髪の毛の下から覗く伏目がちの瞳が僕に向けられており、僕はドキツとした。

そんな自分を恥ずかしく思い慌てる僕に追い討ちをかけるように、その子が小さく笑った。眉を少し下げた、困ったような笑みだ。

僕はなんでその女の子がそんな顔をしているのか分からずにさらに混乱する。

どうしようと横に顔を向けるとたんぽぽのような頭をした男子が僕の方を見ていて、テンションが一気に下がった。

とりあえず声をかけることにする。

「ええっと、君も怖い話、好きなの？」

「……、……、……ふはっ」

「え？」

たんぽぽのような頭をした男子がいきなり吹き出した。

僕の言葉に最初は耐えるようにしていたのだが、耐え切れないと
いったように吹き出された僕は呆然と彼を見詰める。

そんな僕に、待てと言うのか、タイムという意味なのか（どちら
も同じか……）目の前に手の平を突き出して笑いを抑えようと必死
になっていた。

馬鹿笑いをしているわけではないものの、肩を小刻みに揺らして
笑うその姿は、僕を一頻り馬鹿にしている。僕は嫌な感情を覚えた。

「いや、あのごめん。顔を赤くしてこっちに向いたと思ったたらそん
なことを言い出すからさ。なんだかおかしくって」

「え、赤くなってたの僕!？」

たんぽぽ頭の彼はここで僕に身を寄せて、耳元で喋った。

「うん。なってたよ。まああの子かわいいからしょうがないと思う
けどさあ」

「いやいやいやいや!」

「俺もね、あの子はかわいいと思うんだ。しょうがない。あんな風に笑われたら男なら誰だって焦るって」

「見てたの!？」

「ばつちり、ね」

僕が彼女に対して赤くなつたのをばつちり見られていたらしい。そのことに再度顔が火照っていく感覚がした。

なんととはなしに彼女を見ると、楚々としている彼女はまだ僕を見ていた。僕は慌てて目を逸らす。

その行動にたんぽぽ頭の彼は「くふはっ!」と空気の抜けるような笑いをもらった。

「でもね、」

たんぽぽ頭の彼が、僕の耳元で揶揄するような、そんな軽い調子で告げる。

「あの子は止めておいた方がいい。自分の身が大事なら、な」

「え?」

そう言つて彼は僕から離れた。

僕は問うように彼を見るが、彼は人の良さそうな顔で笑っている

だけで僕にその意味を教えてくださいそうに無かった。

怖い話好き故か、僕はそんな彼の態度にぞわりと蠢く興味が意味を構築していく。

こういうのは、定番なのだ。怖い話や怪談話での定番。あるいは物語内での伏線だ。

ぞわぞわと好奇心を膨らまされていく。

彼女には、一体どんな秘密があるのだろうか。

表面では困った顔を維持しつつも、内心彼女の秘密を暴きたいという欲求に駆られながら、僕は諦めた風を装い前を向いた。

目の前には彼女。淡い笑みを浮かべる彼女に僕は苦笑を送った。

「……もうそろそろ、時間じゃないか」

黒板の上につけられた時計。針が七時を差す数十分前だと確認した怖い男子がそう言った。

その言葉にまだ口論していたナルシスト男と後輩が黙る。

怖い男子が椅子の横に置いていた鞆の中から一枚の紙を取り出し、机に置いた。

それは「怖い話をしませんか？」と書かれた例の紙だった。

題字の下には説明書きがある。

怖い男子はその内容をもう一度確認しているのか、目が紙の上を滑っていた。

「開始は七時からだ」

「もう七時なんですか？　のわりにはまだ外明るいですよねえ。怖い話するんだっいたらもうちょっと日が落ちてからの方がいいんじゃないですかあ？　先輩！」

「ま、そうだけどね。でもその紙には七時から始まって十時には絶対終わるように、って書いてあるし」

「何、キモイの。あんたって時間を守る方なの？　キモイしきつかりすぎだし輪にかけてキモイ」

「葵ちゃんは酷いなあ。今度デートしない？　俺自分のバイク持ってるからどこにでも連れてってあげるよ」

「嫌。絶対に嫌」

高校生のくせにバイクを持っているのか。

僕はナルシスト男を呆れた目を見た。良い印象を持ちようが無いこの男が、バイクに乗っているところを先生に見つかって怒られて没収されればいいと密かに思った。

「なあ。始める前に自己紹介しないか？」

たんぽぽ頭の彼がそんなことを言った。

僕はそれに賛成の意を込め頷いた。

後輩はそれに嫌そうな顔をしたが、口を開く前に思い直したのかそのままどっかりと椅子に座る。

張り合う相手がむすつとして黙ってしまったためか、ナルシスト男もやれやれと言った感じに座った。

「じゃあ、てつとり早く俺から行くか」

怖い男子がそう口火を切った。

プロローグ 後話

「俺の名前は桐沢^{きりさわ} 明人^{あきと}。二年生だ」

怖い男子の名前は桐沢というらしい。

僕は桐沢君と同学年であることに驚く。

一応、クラスは九クラスまであるから知らなくても当然なのかもしれないが、それにしてもまったくといっていい程に僕は桐沢君のことを知らなかった。

ここまで筋肉が逞しい、不良だとは言わないが、見た目が怖い人を知らないというのもおかしい話だと僕は思った。

桐沢君がそれっきり黙ってしまったので、たんぽぽ頭の彼が続きを促すように言った。

「それで終わり？」

「他に言うことがあるのか？」

「あー……そうだなあ。どうせこれが終わったら知らない者同士だろうし、あんま奥まったもんを聞くのも……。あ、そうだ。今日話す怖い話の分類というかジャンルを言ったらいいんじゃないか？」

「ジャンル？ 俺が経験したことやその他」

「うわあ……。シンプルというか説明する気まったく無いというか……」

「一括にはくれない」

「そっか。じゃあ次は君から」

「え？ 僕！？」

「順番で行こう順番で」

唐突に振られた僕は焦って何度ももりながら自己紹介を始めた。

「あ、僕の名前は藤谷^{ふじたに} 健一^{けんいち}です。学年は二年で、今日話すのは都市伝説などの類のものです。よろしくお願いします」

「ねえ君本当に根暗っぽい性格してるね！ そんな入学式後のクラスでの自己紹介じゃないんだから、きつちりしないでいいよ！」

ナルシスト男が僕の自己紹介を笑いながら貶した。

コイツ……。僕のことをいじりのターゲットにしているな……。

僕は不快を教えるためにナルシスト男を睨む。ナルシスト男は「怖い怖い」と肩を上下させた。

「あんまり突っかかるのはよくないと思うよ」

「いーんだよ。なんだって俺はここにいる奴らよりも偉いんだからな」

たんぽぽ頭の彼の注意もどこ吹く風で受け流す。
それに若干イラつきながらも、僕はナルシスト男の一人称に違和感を覚えていた。

さつきから「俺」と言ったり「僕」と言ったり、忙しい奴だ。
たんぽぽ頭の彼は溜息を吐いて自己紹介を始めた。

「俺は石戸谷 蓮治^{いっしや ねんじ}。二年生。俺も自分の周りの話が中心になるかな。あ、あと作り話なんかも」

「捻りがなあーいでえーす先ばあーい」

「いや、自己紹介で何を捻るんだ？」

「好きなタイプとかー、この頃ハマってるもんとかー」

「あ、じゃあね葵ちゃん。僕の好きなタイプはねー……」

「あんたには聞いてない!!」

また口論をし始めそうだ。

と思ったが桐沢君の「うるさい」という声に後輩が大人しくなった。

流石の彼女でも桐沢君の怖い顔には怯むようだった。

「今度は僕の番? 八代 陣内^{やしろ じんない}三年四組三十一番バイクでそこらへん周るのがこの頃の楽しみでー、そんな時に遭遇したこととか伝聞

話そうと思ってまーす」

「いらない情報だわ」

「俺のクラスに遊びに来てね？」

「嫌」

本当にまったく知らない情報だ。

僕は次の人にへと目を向ける。淡い笑みを浮かべている彼女だ。どんな声なのか期待しながら僕は彼女の紹介を待った。

「……城島（じょうじま） 秋穂（あきほ）です」

「え？」

小さく、だが全員の耳に届いたであろう声に、ニヤニヤと笑みを浮かべていた八代が虚を突かれたような顔をして城島さんの方を見た。

疑問に声を上げられた城島さんは、不思議そうに八代を見ている。八代は八代で、不可解だとばかりに眉根を寄せていた。

僕は二人が見詰め合っていることに不快感が頭をもたげる。

「あの……、なんででしょうか？」

「えーっと、んー、……いや、なんでもない」

「はい……それじゃあ続けますね……」

八代は少し慌てたようにしていた。

だがすぐに話を切ると頭の後ろで腕を組んで椅子に深くもたれる。僕は八代のその行動に疑問符を浮かべながらも、どうでもいいと思ひ城島さんに顔を向けた。

「一年生です……。今日は、色々と話します。……よろしく願います」

「ちょっと、色々って何よ色々ってえー。気になるんだけど！」

「え、えっと……ええっと……。……身の回りの話を……」

「なにー？ みんなそればっかじゃん！ まあ私もそうなんだけどさあー」

むくれた顔をした後輩は、かわいさをアピールするためかそれとも素なのか、膨れた頬に人差し指一本当てて頬の中の空気を押し出す。

流れるような動作だったので、多分素なのだろう。それが動作慣れしているか。

邪魔な空気を出した後輩はにぱつと花が咲くような笑顔で、机を軽く叩いた。

「次私ねー？ 私は横坂^{よこさか} 葵^{あおい}、今年入ったばかりのぴっぴかの一年生でーす！ 友達の話とか友達の友達の話を今日はしたいと思いまあーす！」

「ほうほう。いいね、葵ちゃんの友達はかわいい子ばかりだから、彼女らの話だと思つととても興味があるよ」

「げえー！ だからなんで八代先輩は私のことを知ってんのー！？ 本格的にキショイ！」

まったくの偏見で言うが、八代は粘着質そうな声をしてナルシストっぽいので、ストーカーをしているのだろうかと思いたくなる。嫌な先輩だとは思つても、流石にストーカーなどの犯罪行為をしているとは思いたくはなかった。

「あと数分か」

「早いなあー。んじゃ、俺準備するわ。他の人もカーテン閉めるなりなんなり手伝つてくれよ」

桐沢君の言葉を石戸谷君が拾う。

立ち上がって邪魔な机をさらに壁際に寄せたりカーテンを閉めにいたりしている二人に釣られるように僕も立ち上がった。

僕はそそくさと教壇にある机から蠟燭の箱と安そうな六本のライター、それと黒いソーサーを六枚取り出した。

「こんなの見つけたよ」

「なににー？　って用意周到じゃん！　うわー、それっばーい！」

横坂さんが興奮したように僕の手から蠟燭の箱をもぎ取った。

まだ封を切られていないので、横坂さんが剥ぎ取っていく。その間僕は六人の机の上に黒いソーサーを置いていった。

「なんでこんなもんがあるんだ？」

「うわ石戸谷君か、びっくりした。んー、さあ？　百物語でもしろってことかな」

「この紙には怖い話ならいくら続けてもいいと書いてあるぞ」

「百物語とは書いてないね」

ひらひらと紙を揺らす桐沢君の手元の紙に目を滑らす。

百物語だとは書いていない。怖い話ならいくらでもしていいというのなら、百未満で話が尽きればそこで終わってもいいし百以上に怖い話をしてもいいということだろう。

その他には怖いと思う話や不思議な話ならなんでもしていいという記述がある。

幽霊に関したものでなくても、宇宙人の話やその他の不可解な話も大丈夫だということか。

それと話を進める際、十話毎に休憩を入れて下さいとも書かれていた。

「でも、蠟燭が出てきたってことは百物語だよな」

「いつそのことやっちゃいます？」

「うーん……。六人で百個の話……。俺そんなにネタ続かねえかも」

「私ですよー。でもお、あの紙には百物語をしろって書いてませんし、百物語っぽいことしても自分達が百物語だと思ってなかったらしいんじゃないですかー？」

「んな適当な」

横坂さんの言葉に呆れる石戸谷君。

僕は少し考えてから、横坂さんの言葉に賛成した。

「まあ、こういうのは雰囲気大事だし、自分達の好きにしていっていいんじゃないかな」

「寄ってきたらどうするんだ」

桐沢君がことさらに真剣な顔をして言ってきた。

「大丈夫だと思うよ。多分ね」

「お前も適当だな、藤谷」

「うん。だって幽霊なんて信じてないし」

「びびりだあーって自分で言ってたくせに幽霊信じないんですかあ？　なんかそれおかしくない？」

「おかしくないよ。僕はいきなりの物音や変な現象に驚くだけだから」

「その物音と変な現象を、幽霊が起こしてるって思わないんですかー、先輩？」

「そうだったら面白そうなんだけどね。でも、実際にはいないんじゃないかなあって思うと、どうも信じれなくて……」

「なにそれよく分かんない」

横坂さんはひらりと身を翻して自分の席に座った。

シャツという音と共に教室内がさっきより暗くなった。それでもカーテンからはまだ光が透けている。何時になったらあの日は無くなるんだろうか。

横坂さんが言っていた通り、暗い方が雰囲気があって断然良いと僕は思う。ただ、あの日が落ちるのを待っていたら八時を超えるかもしれない。その間の時間が無駄だし退屈だ。

しょうがないか、と諦めて僕は自分の席に座った。皆も席に戻ってきて（八代はずっと席に座っていた）、横坂さんから回されてくる蠟燭とライターを受け取った。

窓は閉めきつているが、この教室にはクーラーが付いているため暑さに喘ぐ必要は無い。

クーラーは十時まで稼動していると紙に書いてあるので、それまでは大丈夫だろう。

それに雑に置かれた机のせいで見えなかったが、どうやら小さな冷蔵庫もあるようだ。その中には飲み物も入っており、本当に呆れた周到さだった。

「じゃ、時間もそろそろだし、始めよつか」

「あの……。でも、誰から話を……？」

横坂さんのことさら明るい声に、城島さんがおずおずと訊ねた。それに八代が反応して「じゃんけんで決めたら？」と、八代にしてはまともな提案が出され、皆それに頷いた。

「八代先輩提案つてのがやですけどー。やってやりますよ」

「ツンデレ？」

「ちょっと石戸谷先輩からかわないで下さいよー！」

「負けた奴一人決めて、そいつから順に話をするぞ」

「はいはあゝい！ 桐沢先輩流石でえゝす！」

八代以外の男子には比較的友好的なようだ。

あからさまなその態度にも、八代はニヤニヤと笑いつばなしだ。
打たれ強いとは何か違うような気がする。

皆の合図と共に繰り出される手。勝負は奇跡的に一発で決まった。

「ああ……。やっぱりかあ……」

「よし、決まったな。石戸谷から順に藤谷、俺、横坂といこう」

「こういつのつて時計回りがお約束じゃないですかあ？」

「時計は嫌いなんだ。以上」

「なんですかそれ！ 別にいいですけどあ……」

横坂さんはそう言いながら蠟燭に火を灯す。

蠟燭を横に傾け、蠟が落ちるのを確認すると蠟燭をその上に置いた。

横坂さんのキャラならそのままソーサーに置いて蠟燭を倒すと思っていたが、違ったようだ。

皆の蠟燭に火が灯され、時計が丁度七時を差した頃合に、石戸谷君が口を開いた。

「んじゃ。一番、石戸谷蓮治。仲の良かった他校の友達の話をして」

かしこまった石戸谷君の言葉を合図に、会が幕を開いた。

一話 友達の話

いきなりディープな話だけど、悪い。俺溜め込むの苦手なんだ。吐き出したくて仕方ないから聞いてくれ。

中学校の頃に仲良くなった奴がいるんだけど、まあソイツの名前は遠野っていうの。

遠野はお調子者でな、中学の入学式の時にいきなり俺の背中を叩いてきたんだ。最初はびっくりしたよ。

だって俺ソイツのこと知らなかったし、遠野も俺が初対面だって知ってそんなことをしたって言うし、意味わかんねえの。なんとうか馬鹿だったんだろうな。遠野は。

で、その遠野なんだけど、ソイツがまたいつもいつもへらへら笑ってる奴で、中学三年間同じクラスで仲良くやってたけど、一度も怒ったところを見たことねえの。

遠くから見てる奴から見たら「よく笑う奴だな」ぐらいの認識で済むんだろうけど、俺から見たらちよつと異常な奴だった。

別にそれで何か問題を起こしたわけでもないからいいんだけど、やっぱちよつとした違和感が気持ち悪かったわ。

それから三年生になって、進学する高校を決める時期になった。

遠野は俺と同じ高校が良いって言ってたけども、俺は正直嫌だったんだよな。

いつも笑ってて面白いし、良い奴なんだけど、なんか気持ち悪いんだよ。

なんていうのかな。依存されてるなあって分かるのがさ、それを隠そうともしてないし、引っ付かれていると思うと遠野の笑った顔がなんか粘着質な、ドロドロとした気持ち悪いもんに見えてきてさ。俺、こいつと同じ高校に行きたくないって思ったんだ。

なあ、藤谷君もそうだよな？ 俺間違っちゃいないよな？

藤谷君も粘着されてるなって思ったら離れるよな？

そんな慌てなくてもいいだろ。答えるよ。

……そうだよな。俺は間違っちゃいないよな。俺の感覚は真つ当
だつたんだよな。

うん。間違っちゃいない。間違っちゃいないんだ……。

……。

……。

あ、ああそれでね、俺がこの高校に入学が決まって、俺はホツと
したんだ。だって遠野と違う高校だつたんだから。

俺、嘔吐いたんだよ、遠野に。この高校じゃない、他の所に行
くって。

案の定遠野はそこに受験するって言い出してさ。その高校はこ
の高校より偏差値が高いとこなんだよ。俺の頭じゃまず無理。俺頭
悪いし。

遠野も俺とどっこいどっこいだつたはずなのにそこに受かつちゃ
ってさ。俺驚いたね。

いや、受かつてくれないと困るんだけど、まさか本当に受かつ
ちやうなんて思って無くてさ。

それで遠野は嬉しそうに笑いながら俺に受かつたよ、なんて報告
するんだよ。

俺の方はどうだったかと聞いてきたから俺も受かつたって言った

んだ。

……え？ 同じ高校を受けたなら試験の時に顔を合わせるはずだろうつて？ 遠野はそれに気付かなかったのかつて？

藤谷君鋭いな。そうだよ。俺はもう一つ遠野に嘔吐いたんだ。

インフルエンザで倒れたから俺だけ試験を延長してもらったんだつて。

そんな中学のテストじゃないんだから普通に無理な話だつてのに、遠野はそれを信じたんだよ。

な？ 馬鹿だろ？ 本当に馬鹿だろ？ 馬鹿なんだよアイツ。

それで遠野は俺の話を信じて卒業して、それで高校の入学式に、知ったんだ。

俺とは違う高校だつて。俺がいないつて。遠野は俺にメールしてきたんだ。

いつもの遠野の文面とは違う、素っ気ないメール。

俺は遠野からのメールを嫌だなあとthinkながら開いたんだ。

そしたらそのメールにはさ、「石戸谷、どこ」つて、それだけ。

いつもなら蓮治つて打つのにさ、そんな時だけ石戸谷になってたんだよ。

俺その時、流石の遠野でもキレるかー、つてめんどくさいなあって思いつながら返信しなかったんだ。

そしたらさ、またメール来んの。

まあ当たり前なんだけど、俺、いつもへらへら笑つてる遠野が怒つてると思うと、怖くてさ、メール見れなかったんだ。

またメールが来て、また来て、また来て……。

一日だけで五十件以上来たな。

俺、あんまりメールとかやり取りしない方だったから、フォルダにどんどん溜まっていくメールに恐怖したのね。

メールを開こうにも、恨みつらみが書かれているのかと思うと開けなくて、俺、電源落として布団の中で震えてたの。

俺打たれ弱いんだよ。今まで遠野みたいな粘着な奴より、広く浅くな関係で通ってきてたからさ。遠野の扱いが分からなくて、遠野の考えてることが分からなくて何も出来なかったんだ。

もうそれからは怒涛の嵐だよ。

メールに電話が毎日毎日来んの。

幸い俺、自分の家を教えてなかったからさ。それに俺の家は結構複雑な道合いにあんのよ。

だから俺は家までは来ないだろうってタカを括ってたわけね。けど俺忘れてたんだよな。学校には俺の個人情報があるって。

俺が高校に入学して一週間程経って、母校の中学に泥棒が入ったって話を聞いたんだ。で、犯人は捕まった。

皆が予想している通り、遠野だったよ。

遠野は俺の個人情報を見たんだ。俺の住所を見た。

それで警察にしょっぱかれて釈放されて。それから俺の家に来た。何回も何回もインターホン押して、ドアをドンドン叩いて、蓮治いー、って呼ぶの。

俺の母さんがそれに出ようとして、俺はそれを必死に止めた。

「友達なんでしょ？」って言葉に俺は首を横に振るしかなかったね。

何されるか分からない。俺、遠野のこと裏切ったし。もしかしたら包丁を持って俺を殺しに来ているかもしれない。

実際は包丁どころか凶器の一つすら持っていなかったみたいなんだけだな。

玄関のドアが叩かれてインターホンが連続して鳴って、流石に母さんもなんかおかしいと思ってくれたみたいで警察に連絡してくれたよ。

警察が来て玄関が静かになってさ。俺安心したよ。思わず泣いちゃうほど。

でもな。さつきも言ったけど遠野は凶器を持ってなかったんだ。それどころかゲームソフトとかお菓子ばかり持ってきてたみたいで、ちよつと注意されただけで終わったんだ。

それからまあ地獄。朝からドンドン昼も夜も音が鳴るのよ。

俺は外を出られなくなった。

入学後一週間で登校できなくなった。

母さんが毎回警察に電話してくれて、その度に警察に連れて行かれるけどまた来るのね、俺の家に。

遠野の両親はそんな遠野を放って置いて、被害を受けてる俺らにも謝罪しに来ないの。ホントおかしいよ遠野の家族は。

俺も母さんも疲労困憊。

もうこれ以上は無理ー、ってな時に、不意に玄関が鳴らされることになったのな。

一日……二日……三日……。インターホンも連続して鳴らなかった。

俺はやつと解放されたんだって安心したよ。あの時はもうホントギリギリだったんだ。

それで……。あ、そういえば言うの忘れてたけど、俺の家って三階まである一戸建てなんだ。屋根裏もあるぞ。

で、俺の部屋は三階にあるのね。母さんや兄貴、父さんの部屋もある。

ある夜、音から解放された俺はベッドで寝ようとしたんだ。
で、ふと窓の外が気になった。カーテンが引かれてるんだけど、俺はなんとはなしにカーテンを取っ払ったのね。なんであの時俺はそんなことをしたかねえ。

……窓の縁に、遠野の顔があっただ。

下の縁からニョキツて生えるようにして、鼻から上が覗いてたの。俺は絶叫したね。怖かった。すごく怖かった。

しかも、遠野俺の部屋に入って来たの。窓の鍵、掛け忘れてたんだよ。

俺の悲鳴に兄貴が部屋に来てくれて、遠野を押さえてくれたわけね。

兄貴が「警察に電話しろ！」って言うてたけど、腰が抜けちゃって。泣きながら自分の部屋から這いずり出てくしか出来なかった。

それで結局母さんが通報してくれて遠野は捕まったんだ。

不法侵入……ああ、住居侵入罪って言うんだっけかな。

三年以下の懲役または十万円以下の罰金、だっけ？

罰金の方はあんま覚えてねえや。

とりあえず遠野は懲役喰らったんだよ。

親が金を払うの渋ったんだろうな。

遠野は独房入り。俺の生活に安全が保証されることになりました。
！。めでたしめでたし！。

……なんだよ藤谷君。何か言いたそうだな？

ああ……。そうだよ……。『懲役三年』、なんだよ……。

アイツ、三年以内に出て来るんだよ……。

俺、絶対三年以内に一人暮らしするって決めてんだ。

今ん所死に物狂いでバイトしてる。

今日はバイトの息抜きにと思って参加したんだ。

まあこれ以上話しても仕方ないし、これで俺の話は終わりな。
聞いてくれてありがとう。

……。

……。

ああ、そうだ。

最後に一つ言うことがあったんだつた。

ちなみに今話したのはフィクションだ。俺の友達に遠野なんて奴
はいない。

バイト三昧だっていうのは本当だけだな？

それじゃあ藤谷君、次よろしく。

二話 ピアスとバランス

すごいね石戸谷君。僕今の話が本当に起きたことだと思ってすごく怖かったよ。

本当の話じゃなくて良かった。……横坂さん、つまらないなんて言わない。これが本当の話だったら、石戸谷君が可哀想すぎるよ。

あれ？ 石戸谷君。なんでそんな微妙な顔をしてるの？

……なんでもない？ そう。それならいいんだけど……。

それじゃあ今から話すね。

まあ僕が話すのは五人居たら一人は知っているような都市伝説なんだけどね。

短い話です。

あ、そうだ。その前に聞きたいんだけど、この五人の中でスポーツ、部活でもいいや、してる人いる？

……あ、結構いるんだ。

桐沢君は？ ……それスポーツって言うかさあ。……マラソンってスポーツなの？ 身体動かすし、スポーツか……。

横坂さんは？ テニス部？ あ、ちょうどいいね。

いえ八代先輩には聞いてません。城島さんは美術部なんだ。似合うね。

これから僕が話すのはあるテニス選手の話だよ。

スポーツをする人にとってピアスは厳禁だっていう話、皆知ってる？

あ、八代先輩ネタはバラさないで下さいね。……当たり前じゃないかって、八代先輩から出たと思うと信用できませんよ。

なんでスポーツしている人にとってピアスはダメなのかっていうと、バランスが崩れるからなんだ。

片側だけあけるのなんてもう最悪。バランス感覚が狂っちゃうんだって。

それで、そうとは知らずにあるテニス選手があけちゃったんだ。ピアスの穴を。その穴にピアスを通して、それで練習をしたんだ。そしたら、その選手はバランスをうまくとれないことに気がついたんだ。

今まで無かったのに、ボールの軌道っていったらいいのかな。それが変化して。

そのテニス選手は焦っただろうね。でも、時既に遅し。

ピアスを外しても穴は空いたまま。バランスは狂ったままになったんだ。

……ま、都市伝説は都市伝説だから、そのテニス選手の力が落ちてきた時期とたまたまピアスを空けた時期が重なった、とも言われてるけどね。

横坂さん。どう？ この話信じる？

……信じるんだ。ちなみに聞くけど、ピアスは空けてないよね？

……あ、良かった。空けてないんだ。

それじゃあ大丈夫だね。

はい。これで僕の話は終わります。

じゃあ次。桐沢君、お願いね。

三話 『まだまだ』

本当に短かったな。まあ石戸谷の話の後だとさっぱりして良かったかもな。

……そんな目で俺を見るんじゃないよ、石戸谷。頑張れ。応援してるぞ、一応な。

フィクションなんて知らねえよ。頑張れ。……拗ねるなよ。悪かった。悪い冗談だ。だから頑張れ。

それじゃあ話すぞ。

夢の話だ。俺が何歳だった頃かは覚えてないが、多分小学低学年だったな。

俺はある夢を見た。城島のような黒い長髪に紺のロングスカート、白いワイシャツを着た女の夢だ。

……おい、八代。野次を入れるな。エロい話じゃねえよ。

俺はその女と仲が良かった。戦場の跡地みたいな、焼け野原で遊んだんだ。

どう遊んだかまでは覚えてないが、とても楽しかったのは覚えている。

それで、俺が夢から覚めそうだと認識するとその女が秘密を俺と共有するような、なんだかよく分からない物言いで俺に言うんだ。

『まだまだ』

って。俺はよく分かんなかったな。

それから目が覚める。

……この話はここで終わるんじゃない。この女の夢、俺は連続して見るハメになっちまうんだ。

その次の日に俺はまたその女の夢を見た。今度は天国みたいな華やかな場所だった。

俺と女は一緒に遊んだ。内容は覚えてない。学校で友達と遊ぶよりも楽しかったのは覚えている。それで遊び終わった後女はまた俺に言うんだ。

『まだまだ』

って。俺は不思議に思っただけ聞いてみたんだ。何がまだまだなのかって。そしたら女はこう答えた。

『まだまだ』

遊んでる時は色んなことを喋るのによ、そんな時だけ壊れたカセットテープのように繰り返す。

俺は腹が立った。だから何が『まだまだ』なんだよ！　ってキレようとした瞬間、夢から覚めた。

俺はイライラしながら学校に行って、友達と遊んだんだけど全然楽しくなかった。俺の好きなサッカーも、かくれんぼも鬼ごっこも、楽しくなかったんだ。

俺が楽しんでないって周りの奴らも気付いたんだろうな。俺は怒られたんだ。子供って遊びに真剣だからな。俺とよく喧嘩した気の強い奴が「やる気が無いんだったらどっか行けよ！」って言いやがって。

それから血みどろの喧嘩だ。取っ組み合いから石で攻撃したり目潰ししようとしたり、結局擦り傷とかで済んだけど、あれはやり過ぎだった。

先生からも酷く怒られた。けどそんな時の俺は、誰かが怒れば怒るほどイライラして、とう

とう耐え切れなくなつて暴れた。

机を掴んで投げる。椅子を掴んで投げる。色んな物を投げまくつて、気がついた時にはクラスの全員が俺を遠巻きにしていた。

俺は自分でも何をしているのか分からなかった。

ただ、イライラしていた。何か投げた。誰かを殴った。までは分かるんだ。

分かつてたはずなんだけど、何を投げたか誰を殴ったか、椅子を投げた時に椅子を投げたことは分かつて、それが本当に椅子だったのか、いや椅子で間違いないんだが妙な違和感があつて、本当にそうなのか分からなかったんだ。そんでなんで暴れてるのか分からなかったんだ。

……ああ、よくわかんねえか？ まあ適当に流しといってくれ。この感覚は口では伝えられねえよ。

それから俺はクラスの皆から無視されるようになった。

俺が話しかけても怖がる奴だとか、逃げる奴だとか、明らかに俺を避け始めたんだ。

まあ当たり前のことなんだがな。そんな時の俺も、当たり前なことだと分かっていた。

俺は家に帰つて部屋に閉じこもつた。なんで自分がそんなことをしたのか分からない。もう友達俺と普通に遊んでくれないんだろうと考えると、無性に泣けてきた。

一人鼻水垂らして泣いて、泣き疲れた俺は寝た。

また夢を見た。女だ。

今度は学校のグラウンドだった。

何を遊んだのかは覚えていない。遊び呆けていると、時間がやってきた。

俺は泣いて嫌だと叫んだ。俺は友達から、クラスの皆から避けら

れるのが怖くて、現実に戻りたくなかった。

もう今までのように遊んでくれないであろう友達が、俺のことを冷たい目で見てくるのが怖かった。

女と遊んでいる時は楽しかったし、俺は必死に縋った。

そうしたら女は優しく微笑んでこう言ったんだ。

『あとちよつとね』

その瞬間、俺は叫んだ。

女その言葉を聞いた瞬間、言い知れない恐怖がぶわっと噴出したんだ。

さっきまで女の服を握っていた手を離して俺は逃げた。早く夢から覚めてくれと願った。

そうしたら女の声が俺の背中を追ってくるんだ。

『迎えに行くからね』

そこで目が覚めた。

目が覚めると俺は発狂して泣き叫んだ。

異常に気がついた母親がすっ飛んできて俺に色々聞いてたが、俺は母親が何を言っているのか分からなくて、その分からなさにさらに怖くなって泣き叫んだ。

そんな俺に、母親が俺を殴った。

大人の身体と子供の身体じゃあ、たとえ女性の力だったとしても子供の身体は軽く吹っ飛ぶ。

壁に頭をぶつけて、ようやく俺は正気に戻った。

母親は泣き叫ぶのを止めた俺に何があったのか聞いてきた。

俺は夢の内容を伝えた。もしかしたらただの夢だと言って放って

おかれるかもしれないとも思っ、できるだけ必死に、鬼気迫った顔で説明をした。

あの女が俺を迎えに来る。迎えに来たら俺は死ぬんだ！ っ。

母親は俺の予想通りに素っ気なくあしらった。

だけど異常なのは母親も分かったようだった。迎えに来る、あの女が迎えに来る……、とぶつぶつ言う俺に母親は学校を休むように言った。俺はその日学校を休んだ。

俺は家にいる間ずっとゲームをしていた。寝たくなかったから飯も取らなかった。眠気を紛らわせるために、普段はしない家事手伝いなんかもしたな。

その日はなんとか寝ずに済んだ。けど夜更かしなんてしたことが無かった俺は、次の日は耐えられなかった。俺はいつの間にか寝ていた。

夢を見た。

女は俺の家の中にいた。

一緒に遊ぼうと女がこっちに手を伸ばす。

俺と女は一緒に遊んだ。

眠る前はあんなに怯えていたのに、いざ夢で女に会うとどうでもないような気がした。

その時の遊びは、何故か覚えていた。

俺と女は隠れんぼをしていた。

鬼は女だった。俺は女に見つからないように家の中に隠れ場所を探した。

俺の家も一戸建てで、三階建てだった。多分石戸谷と同じ造りの家なんじゃないか？ 思ったよりも俺と石戸谷の家は近いのかもな。それで俺は屋根裏に隠れることにした。屋根裏には色んなもんが

ごちゃごちゃしてて、物置のようになってたから何かを探そうにも足を取られたりして大変だと思ったんだ。

ごちゃごちゃした物の中から一つの箱を見つけた。

その時の俺ぐらいの身体の大きさならすっぽりと入っちゃうぐらいの桐の箱だった。

俺はその中に隠れた。桐の匂いが心地よかったな。内側から蓋をしめてじっとしていると、俺はじわじわと眠る前の恐怖を思い出した。

なんで俺はあの女と遊んでいるんだろうか。

そう考えた時、屋根裏の下の部屋から何かを倒したような物音があった。

あの女が下にいる。俺は震え上がった。勝手にがたがたと震える身体を止めようとして、けどどう頑張っても震えは止まらなかった。女が屋根裏への階段を見つけたのか、収納した梯子状の階段が下ろされる音がした。

ギツギツと梯子の鳴る音がして、それが鳴り止んだ。俺は女の気配を感じていた。

桐の箱の中に隠れた俺は、階段から背を向けていた。その背中から女の気配が、息遣いが……………。

心の中で必死に「見つかりませんように」と願った。その時の俺にはそれしか出来なかったからな。

獣が獲物を捜しているような、カハーツ、カハーツという声があるけど忘れられねえ。

「どこお？」って言う声かもはや俺の知っている女の声じゃなかった。あれは女のフリをしていたんだ。俺と遊ぶフリをして油断させて、食べるために時期を見計らっていたんだ。

女が俺を捜している。女が俺の隠れている方へと近づいてきた。

俺はもうダメだと思ったな。

女が俺のすぐ傍まで来て……、そこで俺は目を覚ました。

一瞬訳が分からなかったな。

目は開いてるのにあたりは真っ暗だったから。

目を覚ました俺は桐の箱の中にいた。匂いで分かった。俺は自分で自分が桐の箱の中にいるのか分からなくて、なんで夢の続きをしているのか理解できずに混乱した。

とりあえず外に出ようとした俺は気がついた。

女の気配がまだあったんだ。

無音だった。息遣いも何も聞こえなかったが、俺は確信していた。女がいる。現実世界に女がいる、と。

無音でこつちを窺っているだろう女に気付かれまいと、俺は息を押し殺した。

数分……数十分……、多分隠れていた時間はさほど長くはなかったんだろうけど、俺にとっては永遠にも等しかったな。

心臓がバクバク鳴って、身体がどんどん冷えていった。

俺は息を殺し続けて、ようやく女は諦めたようだった。

人間の女にしてはやけに重い足音で俺の背から遠ざかっていった。それが聞こえなくなった頃、俺はやっと解放されると桐の箱を開けようとした。

ギッ、って古い木箱の軋む音がして、隙間が少し開いた。

その隙間から、俺の頭程もある目が見えた。

俺は固まった。

どこかに行つたはずの獣がそこにいた。
白目の部分が赤い目。真ん中の黒目が、しっかりと俺を見ていた。

そこで俺は目を覚ました。

……。

……。

俺がいつの間にか寝ていた時から三日経っていた。

居間でぶつ倒れている俺を見つけた母親が俺を部屋まで運んで行つてくれていたみたいで、それから三日間起きなかった俺を心底心配したんだと。

病院に連れて行こうかとも思つたらしいが、あまりにも穏やかに寝ているもんだから連れて行かなかつたみたいだ。

あれからあの女の夢は見えてないな。

もう見たくない。次見たら、俺は今度こそあれに食われちまうんだろうよ。

そんな予感がする。

これで俺の話は終わりだ。

……あ？　なんだよ藤谷。……桐の箱はどうしたのかった？
ああ。一応屋根裏部屋を探してみたんだが、あつたぜ。
真っ黒焦げの状態だな。

ほら、言ったぞ。これで終わりだ。
次行け次。

四話 待つ人は

うわー、キますねえ。

白目の部分が赤いって、充血だったんですねー。

……わ、「そうかもな」って……。桐沢先輩って結構ノリいいほうなんですか？

あ、はい。分かりましたよー。そんな怒った顔しないで下さいっ！ ちゃんと話しますからあー。

それじゃあ話を始めますね。

私の友達にはレズの子がいるんですけど、そのレズの子が体験したお話です。

本名出すのもあれだからRちゃんって言いますね。

そのRちゃんはですね、インターネットのチャットしてる子なんです。

あんま関係無い話ですけど、私も一緒にやらないかって誘われたんですよ。んでも私タイピングが出来ないんで断っちゃいました。それにメンドクサそうだしー。私は相手の顔見て話す方が好きです。

で、ある日Rちゃんがいつものようにチャットをしててその中で知り合った、あれチャット仲間って言うんですかね？ にー、直接会おうって誘われたんですって。

Rちゃんは最初は渋ってたんだけど、その人、ああもうこっちも名前つけちゃおう。Tちゃんでもいいや。Tちゃんはやたらめったらしつこくてどうしようかって困っちゃって、Tちゃんをドン引きさせるためについ自分はレズなんだあーってことを言っちゃったみたいなんですよ。

そしたらですね、なんとTちゃんが私もですって告白してきたん

です！ RちゃんはTちゃんに携帯のメルアドを教えてたみたいで、告白した後に写メが送られてきたんです。

その写メに写ってるのが、もう、ちょーかわいい子で！ Rちゃん面食いだから即オツケーしちゃったみたいなんですよー！

私も写メに写ってるのがカッコイイ人だったら即オツケーしちゃいますね！ Rちゃんの気持ちすっごい分かります！

で、いついつ会おうか、何して遊ぼうかって盛り上がりながら待ち合わせ場所を決めたんです。後日待ち合わせ場所の公園に向かったRちゃんは、そこで待っているはずのTちゃんがいくら捜してもいないことにムツとしたんですね。

あ、なんでムツとしたかって言うんですね。Rちゃんわざと約束した時間から一時間経った後に来たんですよ。

そうですね。石戸谷先輩の言うとおり、嫌な子なんですよおRちゃんは。

それでRちゃんは一時間ぐらいで帰るなんて酷いじゃない！ つて逆切れしてTちゃんにメールをしたんだって。

待たせるのはいいけど待つのは大っ嫌いなRちゃんはメールした後、帰ろうとしてふと公園の中にいるデブっちょの男の人が携帯を開いてメールを確認してるのを見て、あっ！ って思ったんだそうです。

念のためにRちゃんはもう一度メールを送ったんですね。そして偶然とは思えないタイミングでそのデブっちょの人の携帯が鳴った。

それを見てRちゃんは確信したんです。

そうですね。Tちゃんなんて元からいなかったんです。

そのデブっちょの男の人が嘘を吐いて、Rちゃんに会おうとして

たんですよ！ デブっちょのクセして生意気ですよー！

Rちゃんは怒ってそのまま帰っちゃいました。まあ当たり前ですよねえ。だってありえないですもん。Rちゃんもそう思ってたみたいで、家に帰ってから「ありえない！」って私にメールしてきたんです。

その時に私はRちゃんがレスだったっていうことを知ったんですけどね？

もーホント、最初は驚きましたよぉ。

あ、ちなみに言っておきますけど、Rちゃんは私のことを友達だとかしか思ってませんからね。

私とRちゃんは変な関係じゃないですよー！

あと私今フリーなんで八代先輩以外ですけど、どんどんコクっちゃって下さいね？

もしかしたらこのかんわいいー！ 私と付き合い合えちゃうかもしれないよ！ ってあー！ もう！ ちょっと何してんですか桐沢先輩いー！ 蝋燭吹き消さないで下さいよあー！

……話はもう終わりましたけどお。

酷いじゃないですかあ。

……。

……。

ちょっと思ってたんですけど、そのデブっちょの男の人ってRちゃんに会ってどうするつもりだったんでしょうねえ。

「そりゃあデートするためだよ」って、八代先輩。デブですよデブ。Rちゃんから聞いたんですけど、デブ＋ブサイクだったみたいです。

Rちゃんはめっちゃくちゃかわいい子なんですよ？ 吊りあいが取れないですってば！

……あのですねえ。これは私の勝手な想像なんですけど、この頃出会い系サイトが問題になってるじゃないですかあ。

いい年したオッサンと純情な中学生が現実で会って、暴行されたあーなんて……。

そのデブっちゃんもその類だったんじゃないでしょうか？

公園のどこかにそのデブの仲間がいて寄って集ってRちゃんを……

…、ひゃー！

もしそうだったとしたらRちゃんは危機一髪だったって話ですよ

！ 良かったあRちゃん、無事で。

はい！ じゃあこれにて私の話はここで終わります！

それでは城島さん、次お願いしまあす！

五話 憧れの世界

あ……。もう私なんですか……？
……はい。頑張ります。

では、憧れの世界に旅立ったはずの男性の話でも……。

ある青年がいたんです。特に何か目立った特長も特技も無い、普通の人。

その青年は世間で言うオタク、といった分類に属される人でした。青年自身もそれを肯定していましたが、周りにもお友達が沢山いましたから、特に孤独感を味わったりなんなりはしなかったようです。

その青年は二次元が大好きで、ゲームの中のヒロインに恋をしました。

現実で女性に熱をあげる男性がいますよね。好きになった女性に熱中する。……その青年も、現実で人を愛するようにその女の子を愛しました。

ですが、愛したといっても所詮は二次元。生身があるわけでもないですから、その人を抱きしめることも話すこともできません。

頭の中に思い浮かべても、その女の子は青年が望む言葉しか言いません。

自分を裏切らない、その女の子をどうにでもできる状況はそれはそれで悪くないものでしたが、やはり青年は生身の彼女に会いたいと願いました。

会いたいと強く念じて眠りに入り、夢の中で偶々会えることを願い、そして会えなかったことの失望感を覚えて起きるんです。

……いいですね。ここまで誰かを愛したりできるだなんて。

私も昔はそうやって相手に熱中していたりもしましたが、今は……。

……。

……。

あ、すみません。

お話とは関係ありませんでしたね。

それで青年はある時、こんなにも自分は彼女を愛しているのに、彼女が自分の視界に映らないことに苛立ちを募らせました。

恋をする青年は彼女に会えないことを嘆き、苦しみました。彼女は何故いないのか。何故自分のところに来てくれないのか。

たまらなくなつて友人に恋の悩みを相談するも、相手は実在しない人です。彼女の何が不満か、などの相談でしたら何かアドバイスでもしてあげられたのですが、青年は彼女に会つてすらいらないんです。

ゲームの中と青年の頭の中にしかない彼女に、不満を持つはずがありません。

彼女に会いたい。

どうすれば自分は彼女に会えるのか。

そう何度も何度も友人に問いかけました。

本人も分かつていたんですよ。その問いかけがどんなに無意味なことかを。

ですが、予想に反して友人は「もしかしたら会えるかもしれないぞ」と言いました。

苦しみを吐き出すだけのつもりだった青年は、驚いて友人に詰め寄りました。

友人はあることを青年に教えます。

それは、明晰夢です。

……知っていますか？ 明晰夢。

夢を見ている時に夢だと理解したうえで、好き勝手にできる夢のことです。

明晰夢だと、夢の中で長期間遊べるらしいですよ。

長期間遊べるようになるには特訓が必要らしいですけど。

友人は明晰夢の見方を青年に教えました。

青年はそれはもう必死でそれを繰り返したんですよ。

会いたい。自分の愛した人に会いたい。その一念だけで繰り返し、そして、見たんです。

青年は喜びました。

その明晰夢は、現実とそう変わり無いものだったんです。

触覚があり嗅覚がある。目の前にいる人は自分の思い通りにならない人間で、ですが自分を拒否しているわけではない。

青年は明晰夢に、正に夢中になりました。

夢ですから、時間が経ってしまえば現実に戻されてしまう。

それが歯痒く、寂しかった。

ですが、青年に明晰夢のことを教えてくれた友人がこうも言っていたのです。

『明晰夢で何ヶ月も何年もその世界で生きた人がいるらしいぞ』と。

自分はそこまで到達していない。到達しなければならない。
今までの、一日だけの儚い夢がある日突然第二の現実世界になる。
しなければならぬ。第二の現実世界に。いや、それを現実にし
なくてはならない。

そんな志を持って、青年はその日も眠りにつきました。

そしてある日。何回も何回も明晰夢を見ているうちに、青年は感
じ取りました。今の自分なら、行けると。

青年は慌てて友人の下に向かい、あるお願いをしたんです。
そのお願いとは何か。

それは『自分を殺して欲しい』というものです。

……突拍子も無いですか？ 石戸谷さん。

ええ。彼は明晰夢の現実を本当の現実にするために、戻ってこれ
ないように肉体を捨てる決意をしたのです。

彼にとっては夢の中の方が楽しいので、決意という程決断したも
のでなかったようですが。

……それほど、現実が霞むほどに楽しく、嬉しかったんでしょう
ね……。

その無茶なお願いに、当然友人は拒否します。

その代わりに友人は青年に睡眠薬をあげたんです。

自分が殺すのは拙いから自分で死ね。そういうことですね。

そうして、青年はその日、睡眠薬を飲んで寝入りました。

眠る前に青年は、今日彼女の下で一生暮らすんだと胸を期待に膨
らませていました。

それはもう人生は楽しい！ 生きていて幸せだった！ と思わず

大声で叫んでしまうほど楽しみだったんです。

……ですがね、可哀想なことにその期待は裏切られてしまいました。

青年は目を置かずに明晰夢を見ていました。

見すぎて顔色が悪くなるほど、徹夜明けのようなぼんやりした頭。他人から見たら何かやらかしているのは歴然なほど、青年は不健康でした。

それが祟ったのでしょうか。それとも最期だと思い、納棺されるキレイな死体のように胸で手を組んで寝入ってしまったせいなのでしょう。……彼は悪夢を見てしまったのです。

悪夢。

誰かが追ってくるのでも、何かをされるのでもない。

ただそこは、荒廃した世界だったのです。

愛しの彼女は居らず、ただただ荒れた世界が延々と続く、そんな世界。

青年は慌てました。

必死に夢から覚めようと思いました。

ですが、青年は眠る前に致死量の睡眠薬を飲んでしまっています。目覚めようにも、死を覚悟して、彼女の居る世界で生きることを決意して挑んでしまったので、それはもう念入りに念入りに目覚めないように工夫をしてしまったのです。

青年は愕然として世界を見渡します。

ゆるりと見渡しながら青年は、きつとこの世界は夢のように場面を何個も展開をすることは無いと、おぼろげながらも確信していました。

そしてその確信は覆されることなく、その世界は青年にとっての

現実世界になってしまったのです。

……。

……。

私の話はこれで終わりです。

夢は誰にでも訪れる一時の安らぎです。

このお話は夢に囚われてしまった人の話なんです。

夢は誰でも見ます。ですから、夢の中の住人になりたいと思わないまでも、夢に囚われてしまう可能性は皆さん、十二分に孕んでいます。自分は大丈夫だと思わないことですね。

それにもし、この話の青年のようにどれだけそれを操れるようになったとしても、百発百中、絶対なんてことはありません。

他のことでも言えることですね。気をつけて下さいね。過信は身を滅ぼしますゆえ……。

六話 無題

……ん？ 終わった？ あ、そう。終わったんだ。

いやー、でも、虚構の女に熱を上げるっていうのもよく分からない話だねえ。

現実の女性の方が良いに決まってる。虚しくないのかなあ実際。それで死んでちゃ元も子も無い。馬鹿な男だなあ。

まあいいか。よーし、それじゃあ話すぞー。

この前、朝方バイクでそこらへんを徘徊してた時にね、UFO見たんだ。

そのUFOがさあ、すごい面白い動きをしてね。

こう……ガッ、ガッ、と……。

UFOなんて早々見えるもんでも無いし、僕は面白く思ってそれをずうっと見てた。

そしたらさあ。夜になってた。不思議だよねえ。

……。

……。

何藤谷君。そんな真剣な顔をして俺を見て。

ええー？ 何々。「話の続きを待っているんです」、だって？

何を言っているんだ藤谷君。僕の話はもう終わったよ。

……。

……。

ああそうか蠟燭を消してないからまだ話は終わってないと思ったんだね？

しょうがないなあ。察しの悪い藤谷君のために蠟燭を吹き消してやろう。

ほらどうだ。消したぞ。ほらほら次行く次。

ん？ ふざけるなって？ 何を言っているんだ桐沢君。僕はなんらふざけていないぞ。

どうでもいいけどさっさと先行けよ先。めんどくせえなあ。ほら！ 石戸谷！ 次だ次！

七話 肝試し

ああもうなんですか八代先輩！ それって卑怯じゃないですか！？
「どれだけ短くても話したことは話したんだからいいだろ」って、
あのですねえ……。

……ああーもう！ 話しても埒が明かない！ いいですよ話せば
いいんでしょ話せば！

この企画は怖い話をするものなんですから、次回ってきたら今度
はちゃんとした話をしてくださいね！

それじゃあ話すぞ！

……さて、何を話そうかな。

あ、そうだそうだ。この話なんてどうだろう。

結構最近の話なだけどさ。俺先日友達と一緒に肝試しに行った
んだ。

初夏だから気が早いんだけど、友達の遠藤って奴が行こう行こう
ってしつこく誘ってきやがったから、まあ仕方なく。

その時の話をしようか。

男二人で肝試しに行くと思うとゾツとしないから、俺と遠藤は女
も誘って行くことにしたんだ。

けど遠藤って奴は付き合いの良い女友達つてのをあんま持つてい
ないみたいでなー。結局俺が仲の良い女友達誘うことになった。

ホント面倒臭い奴だ。それでもまあ、いいんだけどさあ。

それで誘った結果、里香っていう女友達とその彼氏の仲遠、それ
と里香の友達の紗枝っていう子が参加することになった。

里香と仲遠はもうノリノリでなあ。端から見ててホントムカツク
ほど馬鹿でラヴラヴな二人だったよ。

真逆に紗枝っていう子は少し大人しめの子で、怖いものが好きじ

やないのか始終困った顔をしていたな。どうにも里香が強引に誘ったらしくて、どうしようかなあって俺は思ったよ。

怖いのが苦手そうだし、遠藤の一言で肝試しをすることになっただけだから絶対参加しなくちゃいけないもんでもないし、俺はどう理由を付けて紗枝を外してやるうかつて考えてたら、遠藤が下世話な顔で「肝試しでカップルができるかも？」なんて言いやがってな。

どうやら遠藤は紗枝に一目惚れしたらしかった。それで肝試しでまわる墓地に手を加えようとか言い出した。

何か脅かすような仕掛けを作って紗枝を驚かせて、遠藤が怖がる紗枝を勇敢に助ける——だなんて妄想をだな、遠藤は実現させようとしたんだよ。

俺は馬鹿だなあコイツって思いながらも、本来肝試ししてもんは驚かせるものだろうとも思ったから、まあいいかってなったんだ。

俺、肝試しって聞くと小学校の頃のキャンプを思い出すんだよね。キャンプ中に肝試しが組まれていて、くじ引きで相手を決めた生徒が二人で墓地に行く。で、先生がオバケの格好をして生徒達を驚かせる。そんな感じで、散々怖がらされて驚かされた役から、今度は怖がらせて驚かせる役になるんだと思ったら、なんだか俺までノリ気になっちゃってな。

それで肝試しをする日時を決めて、その日までに仕掛けを作ることにしたんだ。

仕掛けって言ってもそんな大層なもんを作れるほど頭が良く無いから、肝試しに誘った奴とは別に他の奴も誘ったんだ。驚かせる係り、な。

それで澤と秋山っていう奴らがその驚かす係りになった。遠藤の友達だ。

その二人は子供騙しに赤い火の玉やらなんやらを作ってたみたいだった。俺はといえば、何をするわけでもなくボーツとしてたな。

途中からどうでも良くなっちゃったんだよ。最初は乗り気だったんだけど、妙にやる気が起きない。めんどくさいとも思ったから抜けようかと考えてた。

三人で盛り上がったから俺が抜けても全然支障は無いだろうけど、あの不安そうな顔をした紗枝って子が頭にちらついてな。抜けるにも抜けられなかったんだ。

それで肝試しの当日。

十時頃に里香と仲遠、遠藤と紗枝と俺で近所の墓地に集まった。肝試しのルールは、墓地の最奥にある小さい社まで行き戻ってくる、というシンプルなものだ。

里香と仲遠は相変わらずイチャイチャしてて、遠藤は不安そうに辺りを見回す紗枝を、俺から見たら物凄くわざとらしく気遣っていた。

紗枝は周りの暗さが相俟った墓地の居住まいの不気味さに一杯一杯だったのか、遠藤の言葉はあまり聞いていないようだったな。

肝試しにさあ行くぞってなって、俺達五人は墓地の中に進んで行った。

その墓地は結構広くてな。墓地を囲むようにして木がいっぱい立ってたりするから結構雰囲気が出てて、紗枝はそれに本気で怖がっていた。

遠藤は始終鼻の下を伸ばしっぱなしで紗枝のことを気遣っていたよ。

そして澤と秋山がいる地点にまで辿り着いて、俺はもうそろそろだなと思って木の方を見たんだ。

当初の予定では木の間から火の玉が現れるはずだったからな。けど、その予定は決行されることは無かった。

俺と遠藤は同時に目を合わせ首を傾げた。

誤って俺らが驚かないようにちゃんと目印も決めていたからな。

それを越えたら——だったのに。

まあ仕方ないから俺らは先に進んだ。

何も無いまま社に着き、カップル二人は何もないことに「つまらない」と愚痴ってた。

遠藤は大層不満そうだった。紗枝は何も無かったにも関わらず青い顔をしてて、俺はぶっ倒れやしないかとひやひやしたな。

来る途中何もなかったせいで緊張感が無くなったのか、俺らは他愛も無い話をしながら社を引き返した。

遠藤は紗枝をさらに怖がらせるためにもっと他のところにまわろうとかほざいていたが、当の紗枝が帰りたいと懇願してな。

紗枝の必死さに、そんなことを言い出す遠藤を里香が怒って、渋々だが遠藤は帰ることに賛成した。

俺は紗枝のことが心配になった。真っ暗闇の中懐中電灯の微かな光に当てられた顔色が、本当にぶっ倒れそうなほどに悪かったからだ。

しかもよく見てみれば小刻みに震えているような気がする。

そこまで怖がるとは思っていなかったから、俺は良心が痛んで紗枝に労わりの言葉をかけた。

そんな時、紗枝の歩みが唐突に止まった。

後ろにいたカップル二人はいきなり止まった紗枝に、心配げに声をかけた。

紗枝は答えることなく目を見開いて何かを見ている。

紗枝が何を見ているのか気になった俺は紗枝の視線を辿って、懐中電灯に照らされた帰り道を見た。

俺は、懐中電灯の光がギリギリ届くところに転がっている物を見つけた。

転がっているものが一瞬理解できなかった俺は目を凝らしてそれ

を見たんだ。

それは、人の腕だった。

真っ直ぐ伸びる道の両脇には墓が立ってる。

その墓の方からな、道にニユツとやけに生白い腕が突き出してたんだ。

紗枝もそれを見つけちゃったんだろう。

紗枝の視線を追って固まった俺に、三人も倣ったんだろうな。

——遠藤の悲鳴が上がった。

遠藤は悲鳴を上げて社の方に走っていった。

懷中電灯は遠藤が持つていて、それ一つしか無かったから辺りは一気に暗くなった。

そのことにパニックに陥った里香と仲遠も悲鳴を上げて遠藤を追ったんだ。

紗枝の悲鳴も聞こえて、俺は逃げることができずにその場から一歩も動けなくなった。

頭の中が混乱して、次に俺は何をしたらいいか分からなくて半べそをかきながら横にいるはずの紗枝の腕を取ろうとしたんだ。

そしたら、横から唸り声が聞こえた。

獣が威嚇するときに出すような声だ。

俺は何が何だか分からなかった。

懷中電灯の光に目が慣れていたせいで、周りの物が全然見えない。そんな状態で誰かに、何かに足を払われてこけて、呆然としている俺の耳元で唸り声がした。

俺は声のする方に顔を向けたんだ。

間近に、白目を向いて涎を口の端から垂れ流す紗枝の顔があった。

……それから俺は気を失った。

次に起きた時は朝だった。

墓地の真ん中で寝転がっていた俺はふらふらとしながら家に帰って、遠藤に電話したんだ。

昨日はあれからどうなったんだ、って聞くためにな。

遠藤は俺の無事に物凄く喜んでいた。けど俺が昨日はどうなったんだ、なんで俺を置いて帰ったんだと聞くと受話器越しにも震えるってのが分かるほどに動揺した。

それで言いにくそうに「実は昨日な、澤と秋山の奴らあの墓地に行つてなくてな、その理由が墓地が見つからなかったから、だそうなんだ」と言っただ。

俺はそんな馬鹿なことあるわけ無いって思っただけど、それは遠藤も思っていたようだ。

「あの後、お前や紗枝ちゃんが戻ってこないから、三人で引き返したんだ。それで、お前と紗枝ちゃんを捜したんだけど、どこにもいなかった。あの白い腕も無かった。お前や紗枝ちゃんは、どこにいたんだよ」

俺は訳が分からずに、嘘を吐く俺はずっと道に倒れていたと言っただけど、信じてくれなかった。

終いには「俺を怖がらせようとして言ってるんだろ！」とキレられる始末。紗枝のことを知らないかと聞いても「知らない！」の一点張り。

どう説明しても無駄だと思った俺は電話を切って学校に行った。

それで里香に紗枝は学校に来ているか聞いたんだ。
そしたらな、「来てない」、だよ。

それから日が経って今日、紗枝は未だに学校に来てないみたいなんだ。

……。

……。

紗枝は、一体どうなっちまったんだろうなあ。

俺らが肝試しなんか誘わなかったら、紗枝はちゃんと学校に通っていたのかな……。

やっぱ、肝試しやらなんやらは気軽にするもんじゃないのかもしれないな。

幽霊が本当にいるんだったら、なまじ見えない奴を相手にするよ
うなもんだし。

…… 紗枝は、何かに取り憑かれちゃったのかなあ……。

八話 童歌

あー。今回も怖かったねえ……。

え、いや。だって僕ビビリですし……。

横坂さんはあまり怖くなかったんですか？

……そうですね……。やっぱり僕、ちょっと怖がりすぎなんですかね……？

……次は僕ですね……。

では、童歌の話でもしましょう。

皆さん、かごめかごめという歌を知っていますか？

……はい、そうですね。大体の人が小さい頃に聞き歌う歌です。

その歌の歌詞は、「かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出やる 夜明けの晩に 鶴と亀と滑った 後ろの正面だあれ？」といったものです。

これ、よく考えてみれば歌詞の内容がよく分からないですよ。いつどこで聞いたのか、無意識に口ずさめるこの童歌を読み解いてみるのが、今回の僕の話です。

まず「かごめかごめ」という部分。

これはすぐに思いつきますね。

この歌は一人を中心に輪を作り、歌を歌いながらぐるぐる回った後、歌の終わりと同時に止まります。

そして中心で蹲り目を覆った子が、自分の後ろにいる人を当てる。かごめかごめという歌はそういう遊びですから、「かごめかごめ」は一人を囲むということなのでしょう。

この流れで「後ろの正面だあれ？」という歌詞の意味も分かります。

ですが、真ん中の部分。「籠の中の鳥は いついつ出やる」というのはなんでしょう。

中心にいる子のことなんでしょう。

それに、「夜明けの晩に 鶴と亀と滑った」というのも、折角の鳥を囲んでその鳥はいつ出るのか、という解釈で進んできた中であまりに突拍子がありません。

よく考えたら繋がりが無いんです。

まあ昔の歌は大方がそうなんでしょうけど。

この童歌のことをふと考えた僕は、気になって調べてみました。そうしたらですね。この「かごめかごめ」という歌は色んな意味の解釈が出来る歌なんだとわかりました。

まず一つ。

この「かごめかごめ」という歌は実は流産の歌だという解釈です。「籠の中の鳥」が赤ちゃんで、「いついつ出やる」が出産。そして「夜明けの晩に 鶴と亀が滑った」というのが流産、だそうなんです。

次に二つ。

儀式の歌という解釈。僕が最初に解釈したように「かごめかごめ」は囲め囲めという意味で、真後ろに來た子供を殺すという儀式の歌。

次に三つ。

突き落としの歌だという解釈。

「鶴」は妊婦さんで「亀」が赤ちゃん。後ろにいた、突き落としの人物は誰でしょうというものです。

次に四つ。

こちらも流産なのですが、こちらの「籠」は遊郭です。
遊郭に囚われた遊女が「鳥」「鶴」。

遊女が脱走し、逃げているうちに滑って転んで流産してしまうんです。

最期に五つ。

罪人を処刑する歌だという解釈です。

「籠の中の鳥」は罪人。「いついつ出やる」がいつ釈放されるのかという思い。「夜明けの晩は」は、二度と日の目を見ることができないという現実。「鶴と亀が滑った」は長寿の象徴である動物が滑り、意味が逆さまになる「死」という断罪。「後ろの正面」は罪人の首を切る役人。

……首が断ち切られてころりと転がった首は、後ろの正面になる……というものです。

一つの歌でここまで解釈ができるみたいですね。

実は、僕は「かごめかごめ」の解釈を五つしか言いませんでしたが、実際はもっとあります。

その中で五つ。僕の判断でここにあげさせてもらいました。

さらに知りたいというのでしたら、どうぞ自分で調べてください。

さて、皆さんどうですか。

自分達がいつの間にか覚え、口ずさんでいた歌が、本当はこんなに酷い歌だということを知った感想は。

僕は是非とも皆さんの思ったことを知りたいです。

僕はですね、この歌の意味を、解釈を初めて知った時、別にどうとも思いませんでした。

「へえー、そうなんだ。そんな意味があっただ」と、たったそ

れだけを思っただんです。

ですが、時間が経って考え直してみたら、これ結構怖いことなんですよ。

だって、どんな解釈であろうと酷い話になってしまふ歌をですね、僕達はみーんな知ってるんですよ？

これっておかしくありませんか？

……そうですか？ そんなに、おかしいことはありませんか？
横坂さんはなんでそう思うんですか？

……はい……はい……。

確かに「かごめかごめ」などの童歌は昔から伝わってきていますからね。

「昔」の物を後世に伝えるのは当然だろうと、そういうことですね。

そうです。確かにそうです。「昔」の物は尊重されるべきです。
「昔」の物は色んな教訓が織り含まれていますからね。

……ですが、僕は言いたいのはですね、「なんでこんな残酷な歌を後世に残したのか、歌われ続けたのか」ということです。

親しみやすいリズム運びなのは分かります。その流れでついついこんな時代にまで流れついてしまったのかもしれない。

いつ頃歌われ始めたのかもよく分かりません。ただ、「かごめかごめ」という歌は各地方に異なった歌詞で伝わっていたようです。

昭和初期に山中直治という人が千葉県の「かごめかごめ」の歌を記録をし、それが全国に広がったと言われていますから、それ以前にはもうすでにあったというわけですね。

昭和ですから思っていたよりも最近ですね。ですがこれは各地方に伝わり根付いていたものをまとめた、ということなんです。

根付く、というのは結構の時間をかけないと無理です。

もつともつと以前にこの歌はあり、そしてこの時まで歌われ続けてきたんです。

……さて、どうですか皆さん。
もう一度聞きますが、ご感想は。

……あまり芳しくありませんね。
もつとですね、こう、「それは」だからなんじゃないか」とか、
そういう考察をですね……

……。

……。

……そうですか。無いですか。少し残念です……。
それじゃあ僕の考えを言いましょうか……。

僕はですね……このような童歌はですね……「呪い」なんだと思
っています……。

「呪い」というのはですね……憎しむ心もそうなんですが、「言
葉」を必要とするものと、僕は思っています……。

例えば殺したい相手がいるとします。そいつを憎む気持ちと一緒に
吐き出すでしょう？「言葉」を……。衝動的に……。あるいは慢
性的に……。

「かごめかごめ」の歌でどうやって「呪う」のかは分かりません
が……。いえ……。やはりこれは「呪う」のを目的としているので

はなく歌自体が「呪い」なんだろうなと僕は思っんですよ……。

別に誰かを呪いたいわけじゃない。ただ、「呪い」という形だけを残していく……。そこにあるだけで誰かがその余波を受け、不幸に陥る……。言ってしまえば、日本にいる人間を「呪う」歌なのだと……僕は思っんです……。

僕のこの考えは間違っっているんですかね……？

いや、間違っっているのが正しいんです。

僕の言ったことが本当だったとしたら、それはとても酷い話なんですから……ね……。

……。

……。

はい。ではここで僕の話は終わりたいと思います。

怖い話というよりただの考察になってしまいましたね。

ああ、これは僕一個人の考えですので、真に受けないで下さいね。では、次の人お願いします。

九話 留守番電話

……。

……。

…… 藤谷……。

あまり怖い話はするな……。

…… 違うか。怖いというより、なんだか気持ち悪いな……。
紫鏡を二十歳になった時に思い出したような不快さだ……。

まだ俺は二十歳にはなっていないが……、……、……、嫌なことを
思い出しちまったな……、…… ちくしょう……。

…… ん？ ああ、そうか。次は俺の番だったな……。

そうだな。それじゃあこの前あったことを……。

結構最近の話だ。

俺はゲームが好きでな。

俺の家のリビングには地デジ対応のでっかいテレビあって、その
テレビでいっつもゲームをしてるんだ。

俺、ゲームをしている間は結構集中してるらしくてなあ。母親の
声も時々無視しちまつてるみたいだ。

そんな俺がある日の夜、いつものようにリビングでゲームをして
た。

アクションゲームなんだが、慣れちゃったら作業するようにどんどんと進める、あまり物を考えなくていいものをその時やってたんだ。

そのゲーム、BGMがよくてなあ。その日偶々家族が全員いなかったし……、あ、兄貴はいたか。ああでも自分の部屋で寝てたからいないのと一緒に。

俺一人でリビングでゲームしてるもんだから、音量をでかくしてやったんだ。

それでそのゲームのステージが、ノイズのような音が始終鳴っているようなBGMのステージでな、でも音調やリズムが良いから俺は気に入ってた。

で、思い切り音をでかくしてたもんだから、俺、電話が鳴っていることに気付かなかったんだ。

電話はリビングのすぐ近くにある。けど、俺はゲームをしてたら集中しちまう性質だし、音も、な。

だから俺が電話に気付いたのは留守番に入ってからだった。

俺はゲームをしてて、ステージで流れるBGMに乗って背後からノイズのような音が聞こえることに気付いた。

なんだ？　と思いゲームを一時停止すると、BGMが止まって背後から聞こえる音がより鮮明に聞こえた。

電話からだ。留守番電話に切り替わっていて、そこからザリザリと音がする。

俺は怖くなったな。

怖いものとかあまり好きじゃねえんだよ。

ああ、けど、自分が体験するのは嫌だが人の話を聞くのは好きだ。正に怖い物見たさというか、今回の場合は聞きたさか？　まあそんな感じだ。

怖い気持ちを抑えて耳を澄ませば、ザリザリと耳障りなノイズだ
と思っていたそれがな、なんというか、受話器の前で何か作業をし
ているような音だと気付いたんだ。

ザリザリ、というよりバリバリ、に近いのかな。

なんだろうなあ……。袋をガサガサしているっていうか……。違う
な……。

ああそうだ。テレビとかで台風が来た時、リポーターが現地の状
況を伝えるだろ？ あの時に入る風の音に似ていたな。

でもあれは風の音というよりも、やっぱり何か作業をしている音
だった。

受話器の向こうに人がいると確信できる、そんな音だったんだ。

バリバリ、バリバリ、って背後から音が鳴って、俺はたまらな
くなってゲームを再開した。

ゲームから流れるBGMのノイズがそのバリバリという音に聞こ
えてきてさらに怖くなったりもしたが、俺は必死にゲームに集中し
たんだ。

電話から聞こえる音を聞きたくないから音を下げるわけにもいか
ないし、けどノイズが走るBGMを聞いていると不安になってくる。
早く留守番電話終われ終われ終われと、俺は心の中で何度も何度
も願っていた。

そんな時、背後から悲鳴が聞こえたんだ。

なんつーの。断末魔のような叫びだ。

俺は驚いて背後を振り返った。

そしたらな、電話が置いてある廊下が、暗かったんだ。

夜だったし、家の中が暗かったら怖いだろ？ だから俺は全部の
部屋、自分が行き来する部屋は全部、電気をつけてたんだ。

なのに、廊下の電気が。

……。

……。

留守番電話は終わった。

暗い廊下から「留守番電話を終了します」という無機質な女の声が聞こえてきた。

俺は怖かった。

今すぐにも自分の部屋に戻りたかったが、俺の部屋は上にある。リビングは一階にあったから、どうしてもその暗い廊下を通らなくちゃいけなかった。

俺も結構なビビリだから、そんなことできるわけがなくて、一時停止を忘れていたゲームに目を戻したんだ。

でも廊下に背を向けているのは怖い。だから廊下へと続く入り口が視界に入り、ゲーム画面も見れる位置に移動してゲームを始めたんだ。

その日は親が帰ってくるまでリビングでゲームをしてた。

親が帰ってきた時は心底安堵したなあー。いつもはうざったいだけなんだが、こういう時はホント感謝するよ。

その日は何も無く、寝た時になにか悪夢を見るでもなく、無事に過ぎせた。

それで数日が経って、あの日の留守番電話が気になった俺は、記録を呼び出してみたんだ。

相手は非通知。まあ当たり前だろうが。それで、あの日聞いたバリバリという音が録音されてた。

その音を聞くだけで怖くなったんだが、兄貴も無理矢理付き合せていたからなんとか聞けたな。

録音メッセージは4分間も続いていた。

ずっとバリバリと緩急をつけて、時に休んだりなんかして入ってた。

けどな、俺があの日最後に聞いた悲鳴だけは入ってなかったんだ。俺は疑問に思ってもう一度聞いたんだ。ただずっとバリバリいつてるのを聞くのは嫌だったけど、確認しなかった。

でも、やっぱり悲鳴は入ってなかった。

俺は混乱した。

だって俺はあの断末魔の叫びをちゃんと聞いてたんだから。

驚いて振り向いて、暗い廊下に怯えてあの叫びに恐怖して……。

あの叫び、耳から離れないんだ。

今思い出しても、生々しく思い出せる。

ゲーム内であんな声が出てくるはずがない。

だから、あの悲鳴は絶対に電話から聞こえてきたもののはずなんだ。

……だけどな、俺、その時の叫びを思い出せるんだが……、思い出せるんだけどな……。

俺、その叫びの性別が分からないんだよ……。

ほら、あるじゃねえか。

悲鳴でも、それをあげた奴が女か男かぐらい分かるだろ？

子供の声なのかも老人の声なんかも分かるはずだ。

声帯のエキスパートなんて声だけで詳細の年齢が分かるぐらいだ

し、骨格なんかも分かるって言うし……。

けど、俺はその声が男のものなのか女のものなのか全然、分からなかったんだ……。

低い、思いつきり叫んだものだったのは分かるんだが……。

……。

……。

俺は悲鳴が入っていないか、もう一度録音メッセージを再生した。怖い物好きな兄貴も、最初は興味深々に聞いてたが、三回目ともなると流石に離れていった。

廊下に一人になった俺はそれでも録音メッセージを再生して聞き続けた。

音が漏れてくる口に耳を近づけて、バリバリという不快な音も我慢して、な……。

そうやって聞いているとな、俺はバリバリという音に紛れて何かが途切れ途切れに聞こえるのに気付いた。

女の声だ。これは分かった。女が遠くで必死に「助けて助けて」って言ってるんだ。

よく心霊物である恨みがましいものじゃなくて、生きてる人間が必死に助けを求めている声だった。

俺は不安になって聞き続けた。そして、4分が経って切れた。

……。

……。

俺はここで怖くなった。

おお。何回も怖い怖いって言うてて情けないけどなあ。

実際に遭遇したら怖いもんだろ。俺が特別に情けないわけじゃないぞ。

メッセージを聞いたびにどんどんとか分かっていくのが、怖かったんだ。

次にメッセージを聞いたら、今度は何を発見するのだろうか。

もし次に聞いたメッセージの中の女の声が、必死なものから恨みがましいものに変わっていたら。

……そんなことを考えちゃったら聞く気も失せるっつーの。

俺はメッセージを聞くことをやめた。

またバリバリと不快な音を聞くのは嫌だったしな。

俺は留守番電話にあるメッセージを削除して、終わりにしたんだ。

あ。いいか。一つ忠告しておくけどな。あんまり、好奇心で首を突っ込むんじゃねえぞ。

それからは何事も無かったからよかったものだけど、好奇心で下手に探ろうものなら手痛いしっぺ返しに遭う。

きつとそうに違いはないんだから、自重しておけよ。

これで俺の話は終わりだ。

十話 宇宙人はいる

ちよつとぉー！ なんですか、それ！

なんでそこでメッセージ消しちゃうんですかぁ！ もったいないじゃないですか！

聞き続けてたらどんな面白そうな怪奇現象が起こったのか知れたんですよ！？ うあー！ 私だったら絶対聞いている絶対こんな面白そうなもの自分から捨てないー！

それとどうせ途中で止めるぐらいでしたら今ここで話さないで下さいよぉ。

うゝ……。超気になるう……。

悪かったって、あのですねえ桐沢先輩いゝ……。

…… ああんもうやっぱいいですよ。

それじゃあ次は私ですね？

ずばりですね！ 私、宇宙人はいると思うんです！

宇宙人！ エイリアン！ 火星人居すよ火星人！

UFOに乗ってどこからともなく現れその姿を見てしまった下々の人間達を恐怖に陥れ、時に地上に舞い降りて実験動物とか言つて無垢な動物達（人間含む）なんかを攫つていつてしまうあの宇宙人です！

…… え？ なんで宇宙人がいるって思うのかって？

はい！ 確固たる証拠があるんです！

それはですねえ……。

ずばり！ 「映画」です！

ことわざであるじゃないですかぁ。「火のないところに煙は立た

ない」って！

宇宙人はいるんです。宇宙人が本当にいるから、映画にされちゃうんですよ！

……む。なんですか八代先輩。ニヤニヤしないで下さい！ すつごくむかつかます！

あ、ちよっと！ 石戸谷先輩や桐沢先輩までえ！ 溜息吐かないで下さいよお！

藤谷先輩や城島さんはどうです？ 宇宙人はいないと思いますか？

……藤谷先輩……「いたら楽しいよね」じゃなくて、いるんです！ 絶対いるんですってば！

城島さん！ あなただけですよ葵の味方はあ！

ああそれと他にも他にも、富士山を視察してるなんて話もあります！

知ってましたか？ 富士山って後何年かしたら噴火しちゃうんですよ！

あーんなでつかい山が噴火したら麓の村々なんてひとたまりもありません！

それをですねえ。宇宙人達は面白そうだっていって富士山の周りをUFOでぐるぐる……ぐるぐるとですねえ……。

目撃情報があるんですよー！？ 嘘じゃありませんー！
それにあの世界的な大事件、9・11事件の時も……！

悪いことが起きようとするたびにUFOは見られてるんです！
きつと彼らが何かをしているんです……！

しかももしかですねえ……って、ああー！

桐沢先輩何するんですかあー！ 蠟燭勝手に消さないで下さいよ

おー！

え？ 全然話が怖くないって？

何言ってるんですかすごく怖いじゃないですかぁー！

宇宙人ですよ宇宙人！ もしかしたら人に化けて何か悪さしてるのかも、って桐沢先輩次に行こうとししないで下さいよー！ いじわるうー！

閑話 前話

横坂さんが桐沢君の胸倉を掴み、前へ後ろへと激しく揺さぶる様を、僕は横で見ていた。

「うわーん！」とわざとらしく声をあげる横坂さんは、横にいる僕には気が回っていないようだ。さっきから桐沢君の身体が僕に当たりそうで怖い。

「お前の話が面白くないからだ」

「あー！ さっきは藤谷先輩の話に「怖い話をするな」とか言ってるにいー！」

「だから言っただろう。俺は怖い目に遭うのは嫌だが話を聞くのは好きなんだ」

「なにそれなにそれー！ それじゃあ私の話だって」

「宇宙人なんぞいるわけがないだろう」

「うわーん！ 桐沢先輩のいじわるー！」

揺さぶり運動がさらにヒートアップする。

今まで動じず揺さぶられていた桐沢君の頭が前後左右にがくんと揺れ出した。

流石にこれ以上横坂さんの好きにさせていたらダメだろうと、桐沢君の首を心配しながらおずおずと止めに入った。

「あ、あの、横坂さん」

「なによー！ 藤谷先輩も宇宙人はいないって言っんですかー！？」

「いや、いないっていうか……。僕はいたらいいなって思ってるよ」

「いないって思ってるんじゃないですかぁー！」

「ち、違う。違うんだ」

「何が違うんですか先輩達のほかぁー！」

がくんがくんというよりもぐるんぐるんという擬音が合っているかと思えるほど、桐沢君の首の動きが激しくなってきた。このままでは、首がもげそうだ。

僕はどうしたらいいのか分からずに無意味な言葉の欠片を溢していた。

「横坂さん」

前から透き通る声がした。僕はそちらに目を向ける。

城島さんが凪いだ目で、この状況を笑うでもなく呆れるでもなく、常と同じと口元に緩い弧を描かせ微笑んでいた。

横坂さんの手が止まる。桐沢君の首の運動も止まった。

だらんと顔をこちらに向けている桐沢君の顔は少し青いような気

がした。

「私は、信じてますから」

「じよ、城島さん……！」

「きつといます」

「そうですよね……！　そうですよねえー！」

パツと胸元から手を離され、桐沢君の身体がこちらに倒れてきた。僕は生憎身体を机に対して真正面に向けていたものだから、倒れてくる桐沢君の身体を受け止めることができなかった。僕の座る椅子の角に後頭部をぶつけ、床に落ちていく桐沢君。

「き、桐沢君……！」

「あっはははは！　いいね！　宇宙人の話は楽しくなかったけどこれは楽しいぞ！　いいぞもつとやれ！」

「いやいやあのですね八代先輩。楽しいって言う前に心配をですね」

「うるさいぞお不幸体質！　僕に命令するな！」

あはははと笑う八代先輩をなんとか宥めようとした石戸谷君が何か言われている。

僕はどうしたらいいのか分からなくて横坂さんと桐沢君、石戸谷君に目をうるうろと彷徨わせた。

そうして怖い話をしにきているというわりには賑やかになってしまったこの場を、僕が止めれるものじゃないなと諦めを感じ、僕は時計に目を向けた。

「あつ……もう四十分も経ってる……」

「ええー！？　もうですかあー！？」

僕の言葉に反応したのは横坂さんだ。

本当に、どこにそんな元気があるのかと思えるほど快活に動く横坂さんは、自身も時計を見て「うえー！」と声をあげた。

「……早いものですね」

「早いつてもんじゃないですよ藤谷先輩！　これはもう驚異です！　脅威なんです！　これじゃあ百物語できないじゃないですかあー！」

「ま、待て。横坂。お前は百物語をする気だったのか……？」

「あつたりまえじゃないですかあ桐沢先輩！　ただ怖い話をするだけよりも百物語をする方がぜつつつたい楽しいですもん！」

「ばっかやろう！　百物語なんてするもんじゃねえよ！」

「でもでもー。蠟燭を立ててこわあーい話をしてる時点で桐沢先輩も同罪なんですよー？ 百物語に参加しちゃってるんですよー！」

「俺は百物語をやってるつもりなんか無い！」

「もう遅いですうー！ 遅いんですうー！」

横坂さんと桐沢君が言い合いを始める。

桐沢君の怒鳴り声は、僕の心に恐怖心を沸かせる。

そこらの怪談話をするよりもよっぽど怖い。

身体にビリビリと突き刺さる何かに戦々恐々しながら、僕は少しでも逃げようと石戸谷君の方に身体を寄せた。

ちらりと言い合いをしている二人を見て、横坂さんはあんな怒鳴り声を真正面から受け止めてすごいなあと頭の隅っこで思った。

「藤谷君、大丈夫？」

「全然……」

「ふはっ。そうだよなあ？」

小さく嘖き出して朗らかに笑う石戸谷君もすごいと思う。

こんなに冷静でいられるなんて、僕にはできないことだ。

よく見てみたら城島さんもそこまで動揺していない。むしろ落ち着いていて、それは八代先輩にも言えたことだった。

僕だけがびくびくと身体を遠ざけようとしている。

すごいなあと小さく呟く僕の声は誰にも届くことはなかった。

「ああー！　うるさいうるさいうるさい！！　うるさいぞお前ら！
」

「ああっ！？　お前さっきもつとやれって言ってなかったか？！」

「言ったださ！　それがどうした！　もう見飽きた聞き飽きた！　さ
つさと黙れ！！」

八代先輩が苛立たしそうに叫び、桐沢君がそれに食って掛かるも
横坂さんの「あーもうアホらしい！」という言葉に一応喧嘩は止ん
だようだ。

先輩と桐沢君が互いを睨んでいたが、不意に桐沢君が自分の席に
座り、これでようやくと終わりを迎える。

僕はほうつと息を吐きながら身体を元に戻した。

「うん。まあ、うん」

「なんだよ、石戸谷」

「いやあさあ。二人が口喧嘩しててちよいつと忘れてたけど、もう
十話話したんだよね」

「あー！　そういえばそうですねー」

腕を組んで少し難しい顔をする石戸谷君は、時計を見て皆を見、

そしてニツと笑った。

「じゃあ、休憩か」

「休憩なんていらないよ」

八代先輩が懽然としながら言った。

この人はまるっきりの空話をしたクセに随分と態度がでかい。

石戸谷君は困った笑顔を作って「まあまあ」と手をひらひらと振った。

「紙には十話毎に、って書いてますし」

「無視すればいい」

「そうもいかないでしょ」

「なんだ俺の言うことが聞けないのかこの不幸体質！」

「なんで俺が不幸体質だってことを知ってんですかね……。いや、かの有名な八代先輩に言うのは野暮ですか」

「そうだ。野暮だ」

「はいはい」

僕は石戸谷君の言葉に首を傾げた。

『かの有名な』……とはなんだろうか。

その言葉に惹かれた僕は八代先輩を凝視する。

八代先輩は僕の目に苦々しい顔をして「僕を見るな！」と叫んだ。僕は慌てて目を逸らす。逸らす、が。気になってしまう。

好奇心が芽吹いてしまった僕は、恐る恐ると横目で八代先輩を見た。

口を尖らせムスツとしている。僕は人知れずほくそ笑んだ。

「そ、そうだ。ここって冷蔵庫があつたよね。飲み物も入ってるし、喉を潤してからまた始めようよ」

「あ、さんせー！ 藤谷先輩気が利くうー！」

僕の言葉に横坂さんが元気よく手を挙げる。

この人、見た目がもつと落ち着いてたら好感を持てたかもしれないなあ。

そんなことを考えながら僕は席を立ち、冷蔵庫にへと向かう。石戸谷君が「俺も行く」と言っただけでついてきた。

冷蔵庫を開けると2リットルの炭酸飲料やお茶、アイスまでもが備え付けられていた。

「ラッキー。アイスがある」

石戸谷君は飲み物には目もくれずアイスの箱を取る。

アイスは棒付きのキャンディアイスだ。

何本も入っているアイスの箱を開けつつ、振り返りながら「皆アイスでいいかー？」と石戸谷君が聞く。

横坂さんがまさかのアイスに目を爛々と輝かせていた。

「アイス！？ 葵それがいいー！」

「はいはい」

石戸谷君がにこにこ笑いながら席に戻っていった。

僕は冷蔵庫を開けたままその背を見送る。

冷蔵庫に目を向けると、口を下にしたガラスのコップが十個程並んでおり、残念だと思いつつ扉を閉じた。

僕も席に戻ると石戸谷君が「どれにする？」と聞いてきた。僕は葡萄が好きだったので紫色のアイスを選んだ。

閑話 後話

アイスを食べている間中、シンと静まり返った教室内。

途中、横坂さんが「こつくりさんやろうよ」と提案したが、見た目のわりに怖い物が苦手らしい桐沢君がすみながら止めた。

こつくりさんをやることにどちらかと言うと賛成だった僕は桐沢君のすごみに「いいんじゃないかな。やろうよ」と言えず、黙々と口を動かすだけに留めた。

僕は思うが、ここに来てみんなの話を聞いていると、やはり怖い話を聞くよりも自分で体験した方がいいと再度確認する。

話を聞くだけではどこがどう怖いのか分からない。それは所詮話に過ぎないからだ。僕は極度の怖がりだが、体験したいと思う。今までの話のものを全て自分が体験するのかと思うと得体の知れない恐怖がじりじりと心臓を焦がしていった。

そうだ。これだ。僕はこの感覚が好きなんだ。

好きだけでもやはり話だけじゃあ。

「外に出てはいけない、か……」

桐沢君が廊下に貼られていた紙をまた読み始めている。

桐沢君が読んでいる文字はきつと『話が終わるまで外に出てはいけない』という部分だろう。

これは、つまりトイレにも立つてはいけないという意味だ。果たしてこの人達はその浅い深部まで読み取れることはできるのだろうか。国語力が低そうな人達ばかりだからなあと失礼なことを思ってみたりする。

僕はふと城島さんに目を向けた。

城島さんは赤いアイスクャンディを見ながら小動物のように食べていた。

石戸谷君の言葉が甦り、次に八代先輩に目を向ける。

黄色と白のアイスクャンディを口に突っ込んでいる八代先輩はつまらなさそうに時計を睨みつけていた。

石戸谷君は城島さんに関わらない方がいいと言っていた。八代先輩も訳有りな人みたいだし……。

このメンバーでいいかな、と小さく呟いた。

「ん？ どうした、藤谷君」

「え？ あ、ああいや……なんでもないよ……」

「……？ そう」

石戸谷君はもう食べ終わったようで、頬杖をついていた顔をぐりと僕に向けてきていた。

僕は誤魔化すように八代先輩に声をかける。

「や、しろ先輩」

「なんだ根暗君」

「さっき石戸谷君が八代先輩のことを『かの有名な』と言っているま

したが、それってなんのことか訊いてもいいですか？」

「ダメ」

即答で断られてしまった。

ムスツと不機嫌そうに言われてしまった僕は、それでもやはり知りたくて「ダメなんですか？」と訊く。

「ダメなものはダメ」

「まあまあそう言わずにいー、八代先輩。どうせ学校中に知れ渡ってますしねえ。藤谷君は知らなかったみたいだけでも。皆知ってることを教えてやらないと可哀想つてもんじゃないんですかあ？」

「黙れ石戸谷。だあかあ俺はお前のこと嫌いなんだよ」

「知ってます。というわけで藤谷君、教えてあげるよ」

石戸谷君は奇妙に顔を歪めて僕に顔を傾けた。

その顔は楽しくてたまらないといったもので、僕はその顔が僕の頭の中にある幽霊像にとても似ていると思えた。

なんだろう。何かこの二人には確執があるのだろうか。

「でね、藤谷君」

「喋るな!!」

パンツと机を思い切り叩く音がして僕の身体が竦む。

強張る目を恐る恐る八代先輩に向けると、八代先輩のキレイに整った顔が鬼のように歪みこちらを睨んでいることに気付き、僕は恐怖を感じて身体をさらに縮めた。

「石戸谷！ お前僕に会うのは初めてだろう！ 俺になんの恨みがあるっていうんだ！」

「そりゃあありますよ。でもまあ八代先輩が知るはずのないことですがね。『かの有名な』八代先輩でも知らないことです」

「……………っ！」

ギリギリギリ、

音が聞こえてきそうなほど歯を食いしばっている八代先輩を、石戸谷君は鼻で笑う。

石戸谷君は八代先輩に個人的な恨みを持っているのか。

それはそれで石戸谷君にその恨みを訊いてみたいものだが、今の状況で訊くことはできない。

八代先輩の怒りの矛先をこちらに向けられたくない。

僕はああすごいなあ、と心中で呟いた。

「お前ホントむかつく！」

「俺もだっつの」

「もういい！　僕が自分で言う！　だからお前は黙ってる！！」

「やった。ラッキー。手間省いてくれるんですね八代センパイ。ありがとうございます？」

吐き捨てた言葉を石戸谷君はけけら笑って、なんでもないことのように僕に「良かったね。話してくれるって」と言った。

八代先輩が僕を睨む。目で人を射殺せるなら、今の目がきつとそうなのだろう。

ひゅっと息を浅く吸い込み、吐き出せずに僕は固まった。

「あゝ。もう、いいか？　もういいならさっさと話を続けよう。八代のは話に加えたらいい」

桐沢君がそう言って紙を折りたたみ、新しい蠟燭に火を点けた。八代先輩の目が僕から離れ、僕は細くだが、息を吐き出せることに安堵した。

「ええ？　でも、八代先輩のつてそれ、怖い話なんですか？」

「不思議な話でもいいと書いてあったぞ」

「不思議な話なんですか？」

「なんだ、横坂。お前も知らないのか」

「知りません知りません！ だからとおっても楽しみです！」

「そうか」

横坂さんは無邪気に笑って子供のように身体をぐらぐらと揺らした。

そんな彼女に八代先輩はきつと忌々しそうな顔をしているんだろう。僕はまたあの目に出会ったら嫌なので確認はせずに勝手に想像した。

「……それでは、次は私ですね……？」

城島さんが控えめにか細い声で言い、休憩の終わりを告げた。

十一話 煙々羅

皆さん、煙々羅というものをご存知ですか？

煙と書いて繰り返し、羅刹の羅とつけ「えんえんら」、です。

煙々羅というのは煙の妖怪のことです。煙に宿った精霊とも言われております。煙に人の顔のようなものが浮かび上がるものが煙々羅と解釈されています。

羅刹の羅と先ほど言いましたが、この羅は目の荒い薄布を意味しているようですので、煙の羅刹という意味ではありません。

さて、この煙々羅ですが、これには具体的な伝承がありません。創作妖怪の一つとも言われています。ですが。

私、その煙々羅を見たことがあるんです。

101

ちょっと聞きたいのですが、私の他にも、それらしいものを見たことがある人はいますか？

……えっ。藤谷さんも見たことがあるんですか？

……。

……。

二度。

煙に人の顔のようなものを見たことがあるんです。

一度目は小学校の頃、お風呂に入っていた時です。身体を洗って湯船に入った時に見たんです。

私は長風呂をするので、その日も湯船に浸かってぼんやりと立ち昇る湯気を見つめていました。

最初は今日一日何があったか、明日何をしようか考えていました。けど途中からはただぼんやりと、湯気がゆらめく様を追い、時々湯気を搔くように手で払ったりして遊んだり。

そうしたら、ふっと、一瞬だけですが、皺がいつぱい寄った笑い顔みたいなのが見えたんです。

恵比寿の福顔のような、能楽の翁の面のような、そんなものが目の前に現れたような気がしたんです。

私はびっくりして、しばらくぼーっとゆらゆらとゆらめく湯気を見ていました。

ぼーっとしているとだんだんと怖くなって、私はお風呂を出てすぐこの煙のことを調べました。

ここで、私は煙々羅という名の妖怪のことを知ったんです。これが一度目。

そして二度目は中学生の時。家が燃えて、鎮火した後の焼け跡の中に見ました。

私の家ではありませんよ？ 近所でしたが、知らぬ人の家です。家が燃えた時間帯は夜中で鎮火したのか朝でしてね、私その日偶然にも朝に散歩に出ていたんです。

朝の澄み切った空気を肌で感じたくて、気ままに歩いていました。

そしていつもはあまり通らない道を通って、偶然にも火災現場の跡を見たんです。

真っ黒に焼けてしまった家の周りを人だかりが囲ってしまって、皆一様に押し黙っていました。

本来なら隣の人と何か話をしたりしているものなのだろうが、そんなことをしている人は一人もいません。

私は不気味に思いながらも真っ黒な家を見ました。

家は煙を燻り、なんとはなしに私は煙を追って空を見上げたんです。

その時もただぼんやりと、私は煙を見ていました。

そうしたらふうつと、顔が見えたんです。

お風呂の中で見たものと同じ、皺のえらく寄った笑い顔でした。

それを見てしまった私は、二度目ですから、すぐに怖くなって家に帰りました。

最初に言いましたように、煙々羅とは煙に宿った精霊という説もあります。

精霊が煙に宿るんです。

ですが、精霊が煙に宿る事例があるのでしたら、その煙に人の魂が宿っても別におかしくはないんじゃないのか、と、当時の私は思いました。

湯船で見た煙々羅は精霊で、火災現場で見た煙々羅は人が宿った。そう考えてもおかしくはないんじゃないかと思っただんです。

それでしたら、火葬の意味もなんとなく分かるような気がするんです。

煙に魂が宿るのでしたら、死体を焼いて、煙にして、その煙は空に昇って天上に召されるんじゃないのか。……そう思っただんです。

天上に召されるということは天国に逝くということ。だから煙々羅の顔はあんなにも笑っていたのではないのでしょうか。

……。

……。

私、少し思っていることがあるんですけどね……。

……。

……。

もし私が言うように、煙に人が宿るのだとしたら、

……。

……。

その煙を捕まえれば、それを自分の物のものにできるんでしょうか、と……。

これで私の話は終わります。

……。

……。

……。

十二話 自分の話

…… ああ、終わり。そう。終わりなんだ。
煙、ねえ……。ふーん。だから君は焼いたんだね。
なんだっけ。その煙々羅が欲しくて……。

なんだい、その顔は。

そんな目で僕を見るなよ。

見るなって。

見るなって言ってるだろ！！

……。

……。

ああ、それで次は僕だっけ？
僕の話、か……。

……。

……。

まあいいや。どうせ皆知ってるんだしね。
それじゃあ話そうか。

なんというかねえ、俺は人のことを知ることができるんだよ。
ぼんやりと、それはもうゆらめく煙のような曖昧さでその人が
今までやってきたこと、今まで歩んできた道のことを知れる。
こういうの、超能力って言うのかなあ？

僕が自分のこの能力の異端さに気付いたのは小学低学年の時。
うんうん。俺がこの力を振るった時、それはもう周囲の人間は気
味悪がったね。

俺にとっては普通の出来事だけど、周りの人間はそうじゃないみ
たいだし。

僕はね、別に周りの人間が俺のことをどう思おうがどうってこと
は無いんだよ。

だけどね、『目』だけはだめなんだ。

好奇の目が嫌だ。嫌悪の目が嫌だ。疑惑の目が嫌だ。侮蔑する目
が嫌だ。

目って本当に正直者だからね。嫌なんだ。見られるのが嫌だ。
だから皆あまり僕を見ないでね？ 嫌なんだよ。キモチワルイ。

……ああ、根暗君。君は今疑惑の目をしているねえ……。
その目、嫌いだなあ……。嫌いだなあ……。

石戸谷君の目も、嫌いだなあ……。嫌いだなあ……。
嫌いだよ、皆。僕をそんな目で見んな。嫌いだ。嫌いだ……。

……。

ああそうだ。いいことを思いついた。

根暗君。そんなに僕が疑わしいのなら、僕が証明してやるよ。そうだなあ。まずは城島さんからいこうか？

僕は君みたいな犯罪者は嫌いなんだよ。

あのね、城島君はね、放火したことがあるんだよ。

ああ、すつごく驚いてるね。いい気味だ。

でね、根暗君。城島君は何を燃やしたのかって言うとな、家、なんだ。

なんだか聞き覚えがあるだろ？ そうだよ。さっき本人が話していた話さ。

城島さん。きつと煙々羅が欲しかったんだろうね？

ああそうか。その放火した家の人が好きだったんだ。へえ。だから欲しかったんだ。

ははは。震えてるね。いい気味だ。

……なんだい、葵ちゃん。

「そんな言い方はあんまりじゃないですか！」って……。君、何言ってるの。

それは犯罪者だよ？ 人を殺してるんだよ？

言い方が悪いとかなんだとか、どうでもいいよ。

言われるほどのことをしてるんだから、それを庇う葵ちゃんはどうなんだろうなあ。

ただの自己満足の正義で庇うのはどうなんだろうなあ。

そんな奴、早く殺しちゃえよ。

あ、それでね根暗君。その桐沢君はね、実は僕と同じ学年にな

るはずだったんだよ。そうそう、ダブリ。

彼はね、走るのが好きみたいでさあ。ある日朝っぱらから苦勞なことに走り込みをしてたんだ。そしたらね、交通事故にあった。半年ほど休んで、留年。可哀想にね。よほど追い詰められてたんだろうね。

追い詰められた人間はオカルトに転じやすいつて言うけど、桐沢君もそうだったんだろうねえ？

カーワイーソー……。でも後輩にあたるのはよくないなあ。

でね、根暗君。葵ちゃんんだけどね。葵ちゃん実はエイズ持ちなんだあー。アハハハ。

やんちゃしすぎたってことだよねえー。ああ面白い。面白いなあー。

あと葵ちゃんレズなんだー。

……。あれ？ エイズのことは本人も知らなかったの？

ああそりゃあゴクロウサマ。そりゃあゴシユウシユウサマ。やっちゃったねえ。バラしちゃったよ。

それでね、根暗君。

その石戸谷君。実はそいつが『遠野』なんだよー！ うわあもうびっくり！びっくりだよねえ！

それに『紗枝』ちゃんのことを貶めたのはお前だろー！？

さっきお前、なんで自分が俺のことを恨んでいるのか分かるはずもないって言うてたけど、残念！ 知ってるっつーの！

あの時俺見てたから！ 見てたからな！

あーああ、『紗枝』ちゃんホント可哀想！

何にも知らない『紗枝』ちゃんは、お前が肝試しに行くかと誘ったから来たんだよねー！

お前は『紗枝』ちゃんが自分のことを好きって知ってたから誘っ

たんだよねー！

かわいそうな『紗枝』ちゃん。もう自殺しちゃったんじゃない？
ホント下衆だよね、お前って。

でね、根暗君。君ってイジメにあってるんでしょ？ 手首大丈夫？
今日はよくこんなところに来たね。すごい勇気だよ。
はいはい褒めてあげる。

そつだ根暗く、

閑話

パンツと机を叩く音がした。

僕は驚きすぎて心臓が止まるかと思った。

僕の隣の石戸谷君が机を叩いたんだ。僕はゆっくりと、立ち上がって顔を俯けている石戸谷君を仰ぎ見た。

石戸谷君は、笑っていた。

僕はぞつとして、その顔に魅入った。

石戸谷君の目が見え、八代先輩を見る。笑みがさらに歪んだ。

「八代センパイさあ」

「……なんだい？」

「やっぱ見てたんだ？」

「見てたよ」

「他の奴らのことも、ちょっと調べればすぐ分かることだよなあ？」

「そうだったとしても、一人一人調べるか？ 調べた奴らがここに来ると予想できるか？」

「アンタほどに頭が良かったらできるんじゃないの？」

「頭の良い奴らをなんだと思ってるんだお前は。そんなことを予想できるやつなんて早々いないし、それが僕だったとしてもこんなお遊びにいちいち本気を出すはずがないだろう？」

「そんなチャラけた性格だったらなるんじゃないの？」

「馬鹿だなあお前。……俺が偶然それを見たのは、お前の不幸体質のせいだよ」

「あつ、そう」

そう言って石戸谷君は椅子に崩れ落ちるように座った。

顔はまだ俯けている。たんぱぽのような頭のせいで、髪の毛で顔が隠れることはない。

僕は石戸谷君に持っていた春のイメージが墨で塗りつぶされているのに、ちよつとした落胆を感じていた。

石戸谷君は自嘲気味に笑っていた。

しばらくの間、重苦しい沈黙がその場を支配した。

横坂さんを見ると、息苦しそうに口元に手を当て震えていた。

城島さんは顔を下にして震えていた。

桐沢君はどうでもいいといった感じに、だけど不服そうに眉間に皺寄せて腕を組んでいた。

八代先輩はつまらなさそうにカーテンに仕切られた窓を見ていた。

「……あ、あの」

僕は意を決して声を出す。

場違いだということは知っていたが、早くしないと、と思って勇気を出した。

このメンバーは、……、……、……、

「あ、あの、どうしますか？ 怖い話、続けますか？」

「あー……」

桐沢君が無意味に音を出す。

この場の雰囲気は、お開きにしたい、といったものだった。

……それは困る。非常に困る。これで終わってしまうのはとてももったいない。

僕は言い募った。

「あの、じゃあ僕の話で最後にしませんか？」

「……藤谷君」

「あ、いや、だってね、石戸谷君。せっかく集まったんですし、僕もう少しここにいたいなあ、って……」

「藤谷、お前……」

「桐沢君、そんな呆れた顔しないでよ。僕は、僕はね……」

「藤谷先輩、が、最後なんですか……？」

「うん、そうだよ。僕の話が最後でいいから、それからお開きにしようよ」

「根暗君……君ってホント寂しい子なんだね……」

「う……う……」

非難の目が僕に集中する。

しょうがない。しょうがないことだ。

クラスからイジメられている卑屈な僕の言葉なんて、誰も聞きやしないんだ。

八代先輩がどこから僕のことを知ったのかはわからない。

イジメといっても噂に聞く重度なものじゃない。まだ軽度なものなんだ。

クラスの中にいる人間も、よほどのことがない故に、僕のことをイジメている奴らやその近くにいる奴らしか知らない。

ああ、本当にどこで知ったんだろう。

みじめだ。僕はみじめだ。

だけでも、僕は。

「藤谷君」

前の席に座る城島さんが、いつの間に顔をあげたのか、夢い笑顔で言った。

「私は、聞きたいなあ」

僕はその笑顔を見て確信した。

ああ、なんだ。やっぱり彼女じゃないか。

確信した僕は心の中で笑う。

周りを見回すと、皆「仕方がない」と言った顔でそこに座っていた。

そう、それでいいんだよ。

「あー、それじゃあ、俺も一つ話そうかなあ」

石戸谷君がそんなことを言う。

城島さんはそれに淡く笑った。横坂さんも青い顔ながら少し元気が出てきたようだ。

頭の後ろに手を組んでぶっきらぼうに言う石戸谷君を見ながら、
「嘘……だよ……きっと……」と小さく呟き、なにかを自分に納得させていた。

場の凍った空気は、いつの間にか軟化していた。僕はそのことに少なからず驚き、この機会を逃してはいけないと口を固く結ぶ。

僕は曲がっていた背を伸ばして「それじゃあ、」と言った。

十三話 足音

おう。それじゃあ話すか。

これは友達の友達から聞いた話なんだ。

こういつくたりは都市伝説によくあるけど、まあそんな感覚で聞いてくれ。

ある女子大学生が友達と話していると、その話を聞いた。

その話の内容は「足音を聞き逃してはならない」というものだ。

よくある怪談話の類で、その女子大学生もなんとはなしに話を聞いていた。

夜、一人で砂場のある場所を歩いていると足音が聞こえるんだそう
うだ。

素足で砂を踏む音。その音を聞いてしまったら、音が聞こえた方
を見てはいけない。

もし見てしまえば、身体が無い子供の足を見てしまうからだそう
だ。

そしてその足は自分を見た者についていき、そのまま何もせず家
に帰り寝ると、その足の主に首を絞められて殺されてしまうのだ。

そんな話だ。

その女子大学生は口では「こわあーい！」と言いながらも心の中
では「馬鹿みたい」と思っていた。

足音が聞こえるのも足が見えるのも、そこに本当に人がいるから
で、身体が見えないのは暗かったからだ。

もし本当に幽霊がいるのだとしたら世の中はパンクしてしまう。
彼女はそう思った。

もし見てしまった時の対処法は、家の扉を開く前に自身に塩を振る。それだけでいい。
結局そんなものだ。

その日は友達と分かれて家に帰った。

数日の内は友達が「どう？ 会った？」としつこく聞いてきたので、その怪談話を忘れることができなかった。

だがそういうものは少し時間が経ってしまえばどうでもよくなる。彼女の友達もそうであり、彼女自身もそうだった。

彼女達は一ヶ月もするとそんな話をしたことすらも忘れてしまった。

大学も卒業し、就職も終えた彼女は一人暮らしを眼前の目標に、仕事をしていた。

彼女は真面目な性格だったため、仕事を次の日に持ち越すのをあまり良しとしておらず、その日は残業で遅くまで残ってしまった。

早く帰ろうと支度をし、会社を出、電車に乗って家に向かった。

電車を降り駅から出ると、彼女の家に行くまでに少し暗い夜道を歩かなくてはならない。

彼女はそのことに変質者が出ないかと不安になったが、今までそんなことは無かったし、と気を持ち直して歩きだした。

彼女は一人、電灯がぼつぼつと辺りを照らす夜道を進み、途中にある公園を横切ろうとした、その時。

じゃり、

音がした。

彼女は横目で公園を見、そして見てしまった。

身体の無い、青白い子供の足を。

彼女は驚いて立ち止まった。

横目で見た光景を振り払うように目を前に向け、小走りですこから離れた。

頭の中では大学時代、友達が話していた怪談話が巡っていた。砂を踏む音。青白い足。それを見てしまったら死んでしまう。ぐるぐると頭の中を駆けるそれらの中に、対処法があったことに気付いた彼女は安堵して家に向かう足を緩めた。

彼女はちよつと遠回りにコンビニに行き、塩を買った。

そして家に帰る最中、びくびくと音がしないか、足が見えないかと辺りを見回していたが、途中で馬鹿馬鹿しくなってしまった。幽霊なんていないと自負していたのに、怪談話を思い出したからってなんでここまで怖がっているのか。

彼女はそう思い、家の前まで帰って来た。

一瞬、自身に塩を振るかどうかと迷ったが、塩を振ってしまうと自分が怪談話を信じて怖がっているように思えてしまって、結局彼女は塩を振らずに玄関を開けた。

家族におかえりと言い、返事が返ってくる中、その暖かさにホッと息を吐いて彼女は靴を脱ぎ、靴に挟まりじりじりと音を立てる砂を払い落として家にあがった。

母親が作ってくれた暖かなご飯を食べ、疲れた身体を癒すために風呂に入り、寝るまでの時間にテレビを見て自分の部屋に戻る。

部屋を暗くしてベッドに潜り込んでいる間、友達の怪談話が頭を

掠めた。

少し不安になった彼女は念のためにカーテンを開けて外を確認したが、何もおらず、ついてきていないことに安心して息を吐いた。今度こそベッドの中に潜り込んだ彼女は、自分におやすみと言って眠りについた。

その日、彼女は朝日を拝むことはついぞなかった。

……。

……。

人の忠告は聞かなくちゃね！。
はい。これで俺の話は終わり。

終話 学校の七不思議

はい。それじゃあ最後の話は、僕達の通っているこの学校の七不思議の話でもしましょうか。

皆さん、この学校の七不思議を全て知っていますか？

まず一つは定番の『十三階段』。

二つは『グラウンドの足跡』。

三つは『動く人体模型』。

四つは『放送室の怪』。

五つは『音楽室のピアノ』。

六つは『塗りこまれた死体』、です。

聞いたことがありますか？

……知らない人も結構いるんですね。

まあ高校生にもなって七不思議なんて、馬鹿馬鹿しいですもんねえ。

それじゃあ知らない人達のために僕が説明しますね。

定番どころの『十三階段』は、屋上に向かう階段の段数が増える、というものです。昼は十二段なのに夜は十三段になる。

本当のところを言えばただ数え間違えただけ、一番上の段を数える人と数えない人との違いが出てしまった七不思議ですね。

次は『グラウンドの足跡』ですね。

野球部が部活終わりにグラウンドをならしても、次の日朝来たら徒競走などで使われるコースだけ踏み荒らされている、というものです。

これは、走るのが好きだった陸上部の人間が事故に遭い死んでし

まっつて尚、走りたくて夜中誰も居ない時に走っている、という尾鰭がついています。

僕、これの真偽を確かめるために確かめたんですがね。確かに走っていましたよ。

といつても陸上部員ではありませんでしたがね。

朝一に体育教師が走っていました。本当に早い時間帯でしたよ。

次は『動く人体模型』。これも定番ですね。

こちらで一応調べてみたんですけど、人体模型の足元にある支えの部分が単純に緩んでいただけでした。

次は『放送室の怪』。こちらは夜中「助けて……」という声が放送される、というものですね。

見回りの人が急いで放送室に行っても誰もいない。部屋中くまなく捜しても誰も見つからないそうです。

……ですがね、あの放送室、絶好の隠れポイントがあるんですよ。外から見たら絶対人間が入れないだろうところなんです。身体の小さい人ならずりと入れちゃうんですよえ。

それに、放送室は職員室↓放送室↓客間↓廊下と移動できるので、見回りの人が職員室に行っている間に客間に行つて廊下に出ることもできるんですよ。

その客間も使われていない、いや、廊下側からはどういった理由でなのかは分かりませんが扉が重くて開閉が不便なので、滅多に使われませんしね。

誰かが放送室に行こうとしたら必ず職員室から行くんですよ。……そう考えたらうまくやったら誰でもできる悪戯なんですよね、これ……。

さて、次は『音楽室のピアノ』ですね。

これは言わずもがなの定番ですね。

例の通り調べたのですが、これの真偽は分かりません。

僕が張り込んでる間一回も鳴りませんでしたから。

大方僕が張り込めるぐらいの杜撰な警備ですから、他の誰かも侵入して音楽室でピアノを弾いたんでしょう。

でも、こういった七不思議は広まるにしても誰が広めるんでしょうね？

大体は夜に起こることですから、聞いている人は警備員の人ぐらいしかないというのに……。

警備員が広めているんですかね？

そして次は『塗りこまれた死体』です。

これはこの学校のオリジナルですね。

今僕達がいる教室と同じ階の廊下の真ん中に埋め込まれているという話です。

皆その塗りこまれた死体を無意識に避けるから、キレイに非常用階段と正規の階段に行く人が分かれるんだとか。

これの真偽も分かりません。校舎の壁を掘る訳にもいきませんか
らね。

はい。これでこの学校の七不思議は終わりです。

……六個しか言っていないじゃないか、ですか？

そうですね。桐沢君の言うとおりです。

それじゃあ最後の七不思議を言いましょう。

最後、七つは『六つしかない七不思議』、です。

……。

……。

……。

や、やめてください。

皆そんないたたまらない目で僕を見ないで……。

ですが、これは本当にこの学校の七不思議なんです。
建前の、ね。

……。

……。

はい。建前の、です。

この学校の七不思議はですね、『裏』の七不思議もあるんですよ。
知りませんでしたか？ …… あるんですよ。

ちやあんと図書室の本棚の奥に、そのことが書かれた本があるんですよ。

僕はそれを見たことがあるんですけどね、結構グロテスクなんですよ。

その『裏七不思議』というのは。
その七不思議も言いますか。

- 一つ『首切り桜』。
- 二つ『血溜り池』。
- 三つ『正門の怪』。
- 四つ『人体模型』。
- 五つ『体育館の音』。
- 六つ『塗りこまれた死体』、です。

では、説明していきましょう。

『首切り桜』は、どこにある桜のことを指しているのかは分かりませんが、その桜の下で約束事をしてしまうと首を切られて死んでしまうみたいです。

約束事というのはどんな些細なことでも約束事です。

学校内やその周りでは迂闊に約束をしないように注意した方がよさそうですね。

『血溜り池』は、文字通り血が溜まっている池がこの学校のどこにあるようです。

そういえばこの学校の裏手の門の近くに立ち入り禁止されている場所がありますね。

僕は見たことはありませんがあちらへんにあるのかもしれない。

『正門の怪』は、正門から出ようとすると大きな笑い顔が見えるようです。

その笑い顔は正門よりも大きいとか。
それが見えている間に正門から出てしまうと食べられてしまうようです。

『人体模型』は、学校内にいる人間を食べてしまうようですね。逃げる人を、その人の体力が尽きるまで追い掛け回し、止まった瞬間に襲い掛かってくるだとか。

『体育館の音』は、ボールをつく音に惹かれて体育館に入ると潰されて死ぬ、というものです。

そのボールの音が何の音なのかは分かりませんが、何か恐ろしいものがいてそれが潰すそうです。

『塗りこまれた死体』は、表の七不思議と同じものです。

ただ、これは『塗りこまれた残りかす』と言ったほうがいいかもしれません。

五つの中で死んだり殺されてしまった人が塗りこまれてしまうんです。

だから、塗りこまれた死体というのは一つではありません。人の破片がギュウギュウに詰め込まれているんです。

……はい。これで『裏』七不思議は終わりました。

……。

……。

実はですね、僕、この『裏』七不思議を知って、この企画に参加

したんです。

この『裏』七不思議は、表と違って七個目があるんですよ。その七個目が、僕には魅力的に見えたんです。

……。

七不思議に魅力も何も無いだろう、って？

そうですか？ 僕にはそうは思えませんが。

だって、七不思議、という文字があつて、その内容を聞いてしまったら、確かめたいとは思いませんか？

定番中の定番でしょうが、『十三階段』とかお手軽じゃないですか。

すぐに嘘が知れるものですけども、気まぐれに確認したりしますか？ あるいは確認したくなりませんか？

そういうものなんです。

七不思議は、少し興味を持つてしまえば『確認したくなる』ものなんです。

好奇心をうまく扱ってますね。

そして僕のような奇特な奴は、本格的に確認をしだす。

最後は全部嘘だと知って「あーあ、なーんだ」と思っちゃったりするんです。

七不思議の魅力は『七不思議』という部分にあるんですよ。ちよつとした好奇心、なんです。

僕は『七不思議』にどっぷり嵌っちゃいましてね。

周りの人は馬鹿みたいだと思うかもしれませんが、入学した時に

七不思議を聞いて、ちゃんと確認したんですよ。

……そのせいでクラスの人から変な奴と思われちゃいましたが、まあいいじゃないですか。

この七不思議の中に『本物』があつたとしたら、実にもったいない。

怪異を見る機会をみすみす見逃しているということになっちゃいますからね。

そんな僕が、先日図書室にあつた『裏』七不思議の本を見つけたんです。

もう、見つけたその日から今僕がここにいるこの日まで、興奮しっぱなしでしたよ。

……それで、この『裏』七不思議の最後の不思議はですね、

「『開かずの扉』ならぬ『知らずの教室』、だそうです」

僕はそう言うと、ゆっくりと周りを見回した。

皆が僕を見ている。ゆらゆらと揺れる蠟燭の火に照らされた五つの顔が、全て僕を見ている様は、なかなかの不気味だ。

僕は逸る気持ちを抑えて言葉を続けた。

「その『知らずの教室』というのはですね、なんでも異次元空間への入り口なんだとか」

「知らずの、教室……」

横坂さんがぼつりと呟いて、怯えたように周りを見始めた。

「はい、そうです。その教室は誰も知らない教室なんです。あるにはあるのですが、あまりに使われないため誰からも忘れられてしまったんです。生きた人間が使わないそこはよくないものの溜まり場となり、不浄なものの出入り口になってしまったんです」

「おい、まさかその教室ってのは……」

桐沢君が睨むように僕を見ていた。

僕はその目に怯むことなく笑みを浮かべる。

「お察しがいいですね。そうです。この教室のことです」

瞬間、教室内の空気が張り詰めた。

僕はそのことにさらに高揚して堰を切り、話し出す。

「その教室で怖い話をするんですね、その良くないものたちが異次元空間に招待してくれるらしいんですよ。僕はそれを知ってね、早速試そうとしたんです。ですが、皆さん知っているように僕は大変のびりだ。そう、怖いんですよ。一人は怖いんですよ。ですがね、ことわざにもあるように赤信号は皆で渡ってしまえば怖くないんです。だから僕はこの紙を書いて、七不思議の上に貼り付けた」

ぺらりと真新しい紙を皆の前に掲げる。

その紙には『怖い話をしませんか？』と題字され、その他の注意事項がズラリと並んでいた。

「思っていたよりも少なくてがっかりしたんですがね、まあ僕を合わせて六人いればいいでしょう。先ほど話した『裏』七不思議はですね、この最後の七不思議を試した人だけが见れるんですって。つまり、『裏』七不思議とはその異次元空間の中の七不思議だそうです」

「ふっ、ざけるなよ藤谷い!!」

横に座っている石戸谷君が机を蹴り倒しながら僕に迫った。

机の上に置かれていた蠟燭が床を転がり、それを慌てて八代先輩が踏み消す。

僕は石戸谷君に胸倉を掴まれて、その恐ろしい形相を目の当たりにした。

「なんてことしてんだお前はあっ!!」

「大丈夫ですよ」

「……は?」

にへらと笑う僕を、石戸谷君は呆氣に取られた顔で見つめる。
僕はそれがおかしくてさらに笑みを深くした。

「幽霊なんて、いるわけがないじゃないですか」

「……は?」

「すみません。そこまで怖がるとは思っていません……。悪ふざけが過ぎました」

「……………ッ!!!! ふっざけんなあ!!」

石戸谷君はそう叫ぶと、胸倉を掴んでいた手を離れた。
少しだけ苦しかった呼吸が、しやすくなって僕はちよつと咳き込む。

桐沢君が幾分か安心したような、それが呆れたような溜息を吐いて席を立った。

「あー、俺、もう帰るわ」

時計を見てみるとあれから20分ほどしか経っていない。

桐沢君の言葉を合図に、皆各々の蠟燭を消し帰る準備をし始めた。
僕は「すみません……」と卑屈に頭を下げて、申し訳無さそうに一同を見回す。

その中、八代先輩と目が合った。

「……………」

「……………」

ああ、バレてるや。

八代先輩の非難がましい、苦々しい顔で僕は悟った。
だから、

「八代先輩、頑張ってくださいね？」

「……死ねよ、根暗」

応援してみたら暴言を吐かれました。

まあ、たったのは十四話だ。頑張ればこんな小手先の結界など、抜け出せることができる。

僕はやれやれと肩を上下させて帰る支度を始めた。

皆が教室を出る。そして、僕は彼女と二人きりになった。

「……」

「……城島さん」

「………はい」

ちよこんと大人しく座る城島さんは、儚い笑みを浮かべて僕を見ていた。

僕は昔に戻ったような、人を見下す笑みでもって言った。

「で、どうするんだ？ 僕の魂が宿った煙はいるのか？」

「……ああ、やっぱり……」

彼女の恍惚とした笑みと、この教室に馴染む彼女の姿に、僕は笑みを極限まで歪めながら教室から逃げ出した。

し

石戸谷 蓮治（いしとや れんじ）

高校二年生。男。

俗に言う不良。親が教師。完璧主義者のため潔癖であろうとするが、その反動で全てがどうしても良いと思っている。不良仲間に変化され不法侵入・強姦を実行。不法侵入は親が示談したため不問。

普段は誰にでも優しい。空想・作り話が得意。本当に愛されるということを知らない。

『人体模型』

関連人物

遠野

実在しない人物

遠藤

石戸谷のしたことを知り、怖くなって絶縁。

秋山・澤

不良仲間。三人で女子に暴行。だが石戸谷は親が教師のため言い逃れをし、不問。服役中。

横坂 葵（よこさか あおい）

高校一年生。女。

レズ。数多の男と交際し、全て破局。フツた回数は0。女友達に慰められその道に進むも、裏切られる。本来は大人しい性格。

女友達のことを忘れられずに、女友達が好きだと言った『明るい子』を演じ中。

『首切り桜』

関連人物

Rちゃん

純粋な葵をからかう目的で交際。あまりにもうっとおしかったため捨てる。現在ストーカーに悩まされ中。

桐沢 明人（きりさわ あきと）

高校二年生。男。

元陸上部員。走ることが大好きでマラソン大会などにも出場。高校二年生の夏に交通事故に遭い退部。両脚骨折。後遺症で長くは走れない身体に。陸上部の部員に暴力を振るい、全治一ヶ月の大怪我を負わせる。自殺を図るが失敗。留年をする。オカルトに興味を示す。

『血溜まり池』

八代 陣内（やしろ じんない）

高校三年生。男。

児童虐待を受ける。その時のことが根付き情緒不安定に。超能力者。

親は陣内の能力を恐れていた。陣内がそれに気付いたのは小学高学年、両親共に死去した後。

親戚に預けられるもそのことで遠ざけられる。口調が安定しないのは情緒不安定なため。

『正門の怪』

城島 秋穂（じょうしま あきほ）

享年14歳。中学二年生。女。

ボーダー。被害妄想。妄想癖。好きになった男子に告白するもフラれる。が、自分とその男子が付き合っていると妄想し付き纏う。最期にその男子の家を焼くも、会えなくなってしまるのが嫌になつて家に飛び込み焼死。

『塗りこまれた死体』

藤谷 健一（ふじたに けんいち）

高校二年生。男。

中学二年生の頃女子に告白されるがフリ、それが原因で付き纏わ

れる。仲間が撃退してくれるもその女子は諦めず、嫌気が差してきた頃に家を燃やされる。

それを基に両親共に死亡。かろうじて生き残るも背中や腹などに大きな火傷痕がある。

家を燃やした女子を恨むも、火災時に死んでしまっているために恨みをどこにもぶつけないことができる。『裏』七不思議を見つける。

オカルトに非常に興味を示し、片っ端から読み漁り、幽霊を見ることができるとも『裏』七不思議を見つける。

『体育館の音』

『裏』七不思議

・『首切り桜』

・『血溜り池』

・『正門の怪』

・『人体模型』

・『体育館の音』

・『塗りこまれた死体』

・『知らずの教室』

最後の七不思議を試した者の靈感を底上げ・下駄履きさせる。

異次元空間に繋がっているというのは嘘。

試した者はその後一生、見えなかった時には戻れない。

い

『人体模型』

どうでもいい。

呟いて、俺はどうにも虚しくなった。

俺はなんでこんなところにいるんだろう。

ここは汚いところだ。汚いんだ。汚いのになんで俺はここにいるんだろうか。

人が行き交う雑踏の中、俺は俺を通り過ぎていく人を見ていた。

俺を通り過ぎていく人達は皆俺に注意を向けない。俺がいる意味はここには無いからだ。俺がここにいないくても俺が今立っている位置に誰かが立てばいいからだ。

人は『個』ではなく『人』を見る。

人は『子』ではなく『物』を見る。

ここに立っているのは俺じゃなくてもいいんだ。

だったら俺はいらないじゃないか。

家から出て行っても、親は別にどうとも思わないんじゃないのか。家の中の俺の立ち位置に誰かが立てば、俺はいらないんじゃないのか。

ああ、俺じゃなくて誰かが立ってくれたら。

その考えにうつとりとした。

そうしたら、俺はこんな汚い場所から逃げ出すことができる。自ら汚いことをしなくて済むんだ。

ふと、視界の隅に赤い物が見えて、俺はそちらに目を向けた。

そこには俺を見る人体模型がいた。

俺は「またか」と呟き歩き出す。人体模型は俺の後ろをつかず離れずついてきた。こいつは他人に見えない。俺にだけ見える人形だ。こいつは俺が止まるのを待ってるんだ。

俺は確かにここから逃げたいと思う。

逃げたいと思うが、だからといってこいつに俺をくれてやる必要もないだろう。

だから俺は歩くのだ。

こいつから逃げるために。

こうやって、一人で歩いているのは寂しいと思ってしまった俺は、意識しないまま家を思い浮かべてしまう自分が死ぬほど嫌だった。きつと翌日には身体を食い荒らされた俺の死体がどこかに転がっているのだろう。

『首切り桜』

私は待つていた。

どきどきと高鳴る胸を押さえて息を吐く。

落ち着き無く自身の着ている制服の裾を直し、意味もなく鞆の中に入っている携帯をチェックした。

まだかな、と小さく呟けば、忙しい私をたしなめるように桜の花びらが私の周りをひらひらと舞う。

それに目を向け気を取られた私は、一瞬だけけども時間を忘れることができた。

入学式があつて少し。私は学校の桜の木の下にいた。

ここで待つていてね、とメールで連絡があつたのだ。だから私は待つている。

あの子は私に優しくしてくれたから。私はあの子のことが好きだから。

男の人とは違って女の人はずっと私を裏切らない。私はあの子のことを愛しているんだ。

今まで交際してきた男共を思い浮かべて、それらは全て身体目当てだったことを思い出す。

最初はそうじゃないのだ。最初はそこらへんにいる男女のように、愛し愛される関係でいられた。なのに、男共の愛はすぐに無くなる。愛は無くなってそこには何も残らなくなる。

いつもいつもそうだった。

私は何回も何回も男共に裏切られてきた。

だけど、彼女は男ではない。

身体目当てではないだろうから、今度こそきつと永遠に結ばれる。

私は彼女を待った。桜がひらひら、ひらひらと目の前を舞い――

「待ったあー？」

「うーわー！ 本当にいるんだ！」

「レズの子って初めて見た私ー！ 何？ 男に相手されないわけー？」

私の夢は砕けて散ってしまった。

その半年後、首と胴体が切断された私の死体が桜の木の下で発見される。

『血溜まり池』

ぼんやりと病室の天井を眺めていた。

他人と部屋を同じくすることを嫌う俺を気遣って、親が一人部屋にしてくれたので、俺以外にこの病室に人はいなかった。

開けられた窓から優しく吹き込む風が、白いカーテンをそよそよとはためかせているのを横目で見、俺はなんにも考えることができなくて天井を眺め続ける。

俺は、一体何をしているんだ。

なんにも考えることができない。

あれ、俺ってなんでこんなところにいるんだっただけかなあ。

ようやく天井から下へと視線をずらすと、そこには吊られた俺の両脚があった。

自分で見ても間抜けだと思えるその格好は、俺の絶望だった。

ゆるゆると視線を天井に戻す。

確か朝に走り込みをしていたんだ。

走るのが好きで、走ることだけが生きがいで、走ることだけが楽しみだった俺は、その日走っていて、走っていて？ —— ああ。

その後、どうしたんだっけかなあ。

なんにも考えることができなくなっている。

早く学校に行きたい。学校に行って走って、学校に行くのに走って、走って走って走って、……………、……………、

チツ、チツと時計の音が聞こえた。

俺は横に目を向ける。そこには目覚まし時計があった。友達が、時計が無いと不便だろうと俺にくれたやつだ。

時計は音を立てながら時間を刻んでいく。

この時計は何回回ったか。

俺が走らなくなって何回、この時計は、

チツ、チツ、チツ、チツ、

ああ、そういえば。

そういえばあの時、池を見たんだった。

学校の、正門ではなく裏手の門から俺はその日出て、いや出る前に俺はそれを見たんだ。

いつもなら立ち入り禁止と書かれた扉があるはずだったんだ。

裏手の門の近くに不自然に建つ白い倉庫。一体何に使うのか分からない、真新しく建てられたのか汚れが少ないその扉を、雁字搦めにする鎖。その上に立ち入り禁止と書かれたプレートが、いつもなら、そういつもならかかっているはずだったのだ。

だけど今日は、その時は珍しくも鎖が解け、立ち入り禁止と書かれたプレートはだらりと垂れ下がっていた。

俺は珍しく思った。

好奇心に、勝てなかった。

俺はその倉庫の扉を開けた。

倉庫の中に床は無く、地面に掘られた池がそこにあった。

その池は赤黒く染まっており、カビと埃と鉄の匂いを漂わせたそれに、俺は気持ち悪くなって逃げ出した。

ああ、そうだ、あれだ。

あれを見た次の日、俺は、俺は。

天井を見飽きた俺はゆるりと目を瞑る。

そして夢を見た。

雁字搦めにされた倉庫の戒めを解き、その池に真新しい赤い水を自身から注ぎ入れる未来の俺の夢を。

『正門の怪』

僕は俺のことが好きじゃない。

だって俺はいつだって父さんと母さんに嫌われる。

僕だって愛されたいんだ。なのにいつも俺がそれを邪魔する。

だから無くなってしまえばいいのに。俺なんて、なくなってしまうばいい。

俺は人の過去を盗み見る。

その人が歩んできた道を見てしまう。

それは僕は望んでいないのに、俺が勝手にそれを見る。

僕は父さんと母さんに愛されたいんだよ。俺なんてどっかに行っちゃえばいいんだ。

俺のせいで父さんと母さんが死んだんだ。

俺のせいで親戚のおじさんも僕を嫌うんだ。

俺のせいで僕のことを皆が変なものを見る目で見るんだ。

なんでだよ。全部全部俺のせいじゃないか。僕のせいじゃない。

僕のせいじゃないのに、なんで僕が嫌われなくちゃいけないんだ。

目が、色んな目が、同じ色で僕を見る。

その目が嫌いだ。全部違う目なのに同じ目が嫌いだ。

ああああああ、僕のせいじゃない俺のせいじゃない。

悪いことをするお前らが悪いのに、俺はただそれを言ったただけなのに、父さんと母さんは悪いことをしたら謝らなくちゃいけないよと言っていたのに、僕はそれを信じて俺はお前らのワルイコトを言うのに、謝れって言うのに、なんで、なんでなんでなんで僕だけが悪者なんだ。

お前らなんてしんじまえよ。

僕は逃げる。

今日も『あの有名な』と言われたからだ。

僕は威勢を張って逃げる。

学校の門を、大きく笑う何かに向かって逃げるんだ。

ああ、くそ。

藤谷のやつめ。

お前のことは心底むかつくけど、最大の逃げ場を教えてくれたお前に感謝するよ。

『塗りこまれた死体』

空が青く澄み渡っていた。

学校の帰り道、私は歌を歌って家に帰る。

「えーんえんらー、えんえんらー、ゆらゆらゆれーてえんえんらー、おひとつわたしにくださいなー」

ももたろさんの替え歌を歌い、上機嫌に鞆を揺らして身体を揺する。

今日は私の横に彼はいない。彼は照れ屋なのだ。

私はそんな彼のいじらしさにふふふと笑い、「分かっていますよー」と声をあげた。

極度の照れ屋で、ちよつと怖がりで、不器用で、不器用すぎて照れ隠しに友達を使って私を邪険に扱うのだ。

でも、分かっている。本当は私のことが大好きだってことを！

「知っていますよ」

私はあまり可愛くは無い。

私より可愛い子なんてクラスを見渡せばそこら中にいる。

けども彼は私を選んでくれた。彼は私の落としたペンを拾ってくれて、私に優しい声をかけてくれた。彼は私を選んでくれたのだ。

ぴり、と怪我した頬が痛んだ。

私はそれに顔を顰めて頬に手をやる。

その手にも、ぺたぺたと何枚も絆創膏が貼られており、自分でも結構痛々しいなと思った。

これは彼の友達が私を殴った時についたものだ。

彼の友達は彼に嫉妬しているんだろう。それか、彼のことを取るうとしている私に嫉妬しているのか。

どっちなんだろう。

彼に私が取られるのが嫌なのか、私に彼を取られるのが嫌なのか。

んんー、と考えて、どうでもいいですね、と言った。

笑った顔に傷は容赦してくれなかった。

私はあいたたと笑い、もう一つ違う歌を歌う。

「えーんえんらー、えんえんらー、籠の中のえんえんらー、いーつ
ーいーつー見ーやあーる……」

今日も晴れているのなら、明日も晴れているだろう。

明日晴れたら、夜、彼の元に行ってみよう。私はそう考えて、煙々羅に似ている雲を見て笑った。

『体育館の音』

こんなはずじゃなかった。

僕はこんなはずじゃなかったんだ。

ただ僕はあれを殺したかった。

僕の手であれの首を絞めて、包丁で切って、高いところから突き落として、硬い物で殴って、色々な方法であれを殺したかっただけなんだ。

今までの恨みを乗せて、罵倒して、罵って、僕の受けた痛みをあれに味合わせてから、あれを殺して……。僕はたったそれだけを望んでいたのだ。

それなのに、なんで。

「えーんえんらー、えんえんらー……」

声が聞こえる。

僕は何故か夜の校舎を走っている。

なんで僕は夜の校舎の中なんかを走っているんだ。

「かぁーこのなぁーかのえんえんらー……」

息が切れる。

僕はどこを走っている。

『知らずの教室』から逃げ出した僕は『塗り込まれた死体』を通り過ぎ、『首切り桜』の下を通って『正門の怪』まで来た。

けど『正門の怪』がそこにいて、僕は外に出るにも出られなかった。

「いーつーいーつー見いーやあーるー……」

僕は背後を振り返らずに走る。

こうなったら『血溜まり池』の門から出るしかない。
学校の裏手まで来て、閉まっている門に僕は手をかけようとした。
けど。

「っ！！」

門の外には『人体模型』がいた。

ここで止まったら、僕は食われてしまうのだろう。
僕は門に手をかけるのを諦め、再度走り出した。

「よーあーけーのーばーんにー……」

どこだ。僕はどこに逃げればいい。

殺したかった。僕は両親を、家族を奪ったあれを殺したかったのだ。

だけどあれは、もう。

僕は後ろを見る。

そこには真つ黒い人型の何かがよたよたと僕の後を追うように歩いてきていた。

怖くなつて僕は前に目を向ける。

あれはもう死んでしまっている。

死んでるやつを殺すのは無理だ。

ああ、こんなことになるのなら人の形を保っている間にさっさと殺しておけばよかった。

後悔するも、それは前に立たぬものだったため、仕方なく僕はただ走った。

どこにいけない。

どこに逃げれば僕は逃げられる。

どうしたら僕はあれを殺すことができる。

憎い。憎いんだあれが。殺したい。焼けて悶えて苦しんだとしても、僕はそれでもまだ足りない。あれは、あれのせいで僕は苦しんだんだ。

死んだからって許すものか。死んでからも苦しめばいい。苦しんで苦しめばいいのに、なんであれはあんなに笑っているんだ！！

「えーんーえんらがのーぼったあー……」

逃げて逃げて逃げて、僕は泣きたくなくて、止まることができない僕は霞む思考の中目の前にあった扉に手をかけ、開いた。

その時、ひゅつと何かが空を切る音がして、僕は振り返った。

「後ろの正面、だあーれ？」

真っ黒な笑顔が真っ黒な髪を振り乱して、僕に何かを叩き付けた。頭蓋骨が割れる、その音を聞いて僕は、ああ、壁に埋められる、と馬鹿なことを思った。

逃げようと前に走り出すも、言うことを聞かない身体は建物の中の床に倒れこんでしまった。それでも僕は諦めなかった。諦めきれなかった。

あれを殺してからでも僕は死ねる。けど、あれを殺す前に死んでしまつては、僕がこの七不思議を試した意味が無い。

僕は回る視界を泳ぐ。あがく。足に燃えるような痛みがあるうとも、腹を蹴られ痛みにも悶えようとも、腕を潰され絶叫しようとも、僕は生きなくては。生きて、殺すんだ。

生きて。

ズダンツ、という音がして、肉が潰れる音がして、僕は悲鳴をあげて、僕は呪った。

目の前にいる黒い塊を呪った。

そうすると黒い塊も僕と一緒に潰された。

僕が最後に見たのは、体育館の天井に張り付く大きな顔を背中に背負った何かだった。

その顔は、僕があの日、自分の家が燃える時に見た煙々羅とそっくりだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6153v/>

怖い話をしませんか？

2011年8月12日03時21分発行